
ブラザーズLOVE

choco (青い花)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーズLOVE

【Nコード】

N4275P

【作者名】

choco（青い花）

【あらすじ】

この物語は大学1年生の女子大生が 突然の不幸により、付き合っ

て 1ヶ月のハツカレと遠距離恋愛になるは。

下宿先では全員が同い年という王子ルックスな美形4兄弟と

逆ハーレムの共同生活を共にする事になってしまった お話です。

18日 第15話 胸キ

ユンな脱出劇? 11時更新予定

恋愛上の場面で、PG

12以上くらいの描写を予定ですが、作者では判断し兼ねますので“R15”に指定する可能性があるという事を検討中。話の題に？で、判断できる様にも配慮するつもりです。先の事ですが、その都度は宜しくお願い致します。

UP後4週間以降に印を付与。？の印でキス以上。

800文字以下のページを統合、文章修正を行っております。

プロローグ（前書き）

楽しく読んでもらえればそれだけで嬉しいです。

文章の長さに気をつけながら投稿したいと思います。

視点は三人称 多視点。ラブコメディスト？ 中編から長編の予定
次話から本編の第1話となります。

プロローグ

外は春晩の眩しい太陽の光が降り注ぎ、空は気持ちの良い青空が広がる。

町一番の大通りには、すがすがしい季節のため、たくさんの人々が歩いて賑わいを見せていた。

町の看板には日本語の物はなく、道路の標識や信号機の文字も英語で表示されている。

そればかりか、人々が交わす言葉は日本語ではなく英語を使って楽しそうに会話をしていた。

この事からお解り頂けただける様に、ここは日本じゃなくアメリカ合衆国の中の小さな州。

そして、小さな田舎町。

主人公がこの町で平和な日々を過ごそうとしていたところ、突然、思いもしない災難が降り注いぐのだった。

プロローグ（後書き）

これから頑張つて書いていきますのでよろしくおねがいます。
誤字脱字など不自然な点がありましたら、どんどん活動コメントや
感想などからお知らせ下さい。

作品を書き切れる様、懸命に頑張る事が目標です。

第1話 突然の宣告？

田舎の町並みが残る風景にたたずむ片瀬一家のリビングで、始まりを告げた。

家族3人で食事をする古びたテーブルに優しく陽射しがあたる。窓からは爽やかな風が入り、カーテンレースを少し揺らして吹き抜ける。

「パパ、リストラされたんだ」

父親が急に口を開いたかと思えば、笑顔で思いもしないひと言。

「……っはい？」

間の抜けた声で聞き返したのはこの家の愛娘である片瀬莉亜。

生まれてからずっと暮らしているアメリカ。

入学した大学も、もちろんアメリカの大学。

今年の春に晴れて女子大生になったばかりだった。

容姿はというと両親が日本人なので、見た目からして典型的な日本人。

黒く艶やかな髪、長さはセミロングにスパイラルパーマ。メイクは口に色つきリップをするぐらいのもので、今日もまたノーメイク。そのナチュナルな顔は今もまだ歪んだままの表情。

「今　　今、なんて言ったの？」

父親が言った事が理解できない。いきなりの出来事にもう一度尋ねる莉亜。状況を理解しようと、必死に冷静になろうと務める。

朗らかに笑みを浮かべた母親が、状況の把握できない娘に極めて

重大な事をあっけらかんと言ってみせた。

「そうなのよ〜リアちゃん。パパどうやらリストラされちゃったみたい」

「って、そんな朗らかに、なにっこの状況を説明しちゃってるのっ！ ママっ」

莉亜の元々大きくて丸い瞳が、一層でかくなる。両親をキッと睨んだ。

「あら、何そんな怒ってるのかしら。お顔が怖いわ」

父親は娘の気持ちなんかお構いなしの様子。

莉亜を気にも止める事無く、最愛の妻に愛想よく相づちをつつた。

「そうだね、ママ」

「って、失礼ね！」

莉亜が、いい加減な両親に突っ込んで、ふたりは平気な様子。

「リアちゃん、そんなに怒っちゃダメよ」

「スマイル、スマイル」

父親がそう言って、自分の口角を上げてみせる。

ふたりの態度が理解不能に達している為、莉亜は理解に苦しむ。呆れ果て、ため息をついた。

「もう」

お気楽な両親に一喝しても、まったく効果なしの現状に、不安げな莉亜。

「それよりもこれからどうするの?」

「あらっ今度はそんな事」

「そんな事って、ママ……. すごく重大な事だと思っただけど」

「リアはしっかり者だなあ。パパすっごく鼻が高いぞっハッハッハ」

高らかに笑っている父親の声が、何故だか虚しく莉亜の耳に響いていた。

「いやいや、だからこれからの事なんですけど」

「もう、心配性ねえ。リアちゃんは」

相変わらず笑みを浮かべる母親。向かいに座る娘のおでこを軽くひとさし指でツンツンと執拗に突く。

母親の指をこの世で今一番鬱陶しそうに、莉亜がはらいのけた。気を取り直し、真顔で両親に訴えるのだった。

「それよりもあたしの質問にいい加減真面目に答えて下さいっ」

少しの間沈黙が

「まさか、なんにも考えてないとかじゃないよね?」

引きつる表情を押し殺し、優しく問いかけた莉亜。

無言を決め込んだらしく、何も反応しない両親。

「って……. 何その哀れみの瞳?」

莉亜に指摘されて両親の目玉が不自然な程に宙を彷徨う。
両親の態度に彼女は不信感を募らせるのだった。

（どうみてもおかしい態度……）

11？

莉亜が眼光を光らせ睨む。口で言ってもわからない両親には行動で示すのが一番。勢いよくテーブルに手をバンツと叩きつけ、立ち上がる。

「ふたりとも隠している事あるなら、今のうちに全部吐き出してっ」

拳を握り締めた莉亜はグイッと体を前のめりに突き出していた。動揺する両親を再び睨んだ。

「仕方ないわ。すべて話しましょう、パパ」

「そうだな。説明するから、まあ、まあ座りなさい」

父親に促された莉亜はイスにゆっくりと腰掛ける。

「どう説明すればよいのか、迷っていたのだが」

「この際はつきりと言ってパパ」

「ここまで覚悟を決めた娘に頼まれると迷う事などない、と父親はあっさりと白状する。

「早い話がこの家を出てだな、リア　君は先にひとりで日本に行く事が決定した」

話の内容がイマイチ掴めない莉亜は、眉間にシワが自然と浮き出る。突然の事で戸惑うのだった。

「何言ってるの、パパ？　意味わかんない……し」

「君にとって意味がわからないかもしれないが、もう、決まった事なんだ」

うさん臭い話に、断固、莉亜は拒絶するしかなかった。

「やだっ！」

「やだっ……」

「いきなりそんな事言われても、納得できないもん」

聞く耳持たない莉亜を、父親が聞き分けのない小さな子供を諭す様な口振りで言う。

「仕方がないんだよ、リア 言う事を聞きなさい」

「何言われても今はムリだよっ」

父親はミもフタもない返事を返す娘に困り果てる。

そんな父娘をよそに、のほほんとマイペースで過ごす母親。ズズと音を立ててすすり飲み、ゆつくりとお茶を味わうのだった。

ふたりの会話をただ聞いていただけの母親が、ふがない父親に加勢する為、しゃべり始める。

「あら、断つても住むとこないわよ」

「どうして？ この家にこのまま住めないの？」

「いい所に気づいたね。もうこの家はパパ達のものじゃないんだ」

「嘘」

「嘘じゃないわよ、ここ社宅なんだからあたり前ですよ」

あっけらかんと湯のみ片手に母親は笑って答えた。

「今年の終わりには二十歳を迎えるだろ。そこで国籍を日本とUSAどちらかにそろそろ決めないと、という訳で、日本に住んでどちらかに決めなさい」

「信じられないっ勝手にそんな事決めるなんて」

「ちようどいいじゃない。ねっだからそんなに怒らなくても」

「まさかだけど、これにかこつけて夫婦水入らずでなんて思っていないよね？」

再び沈黙。

少しの間をおいて母親が視線を合わせない様にか、あさつての方向をみつめ出した。

「な、何言ってるのかしらあ。後からママたちも日本に行くのよ」

「そうさ、パパ達が約束破った事があるかい？」

突然、しまりのない父親の顔が鋭い表情に変わり、娘を真剣な眼差しで見つめる。

逆に莉亜は白い目で父親をみる。表情ひとつ変えずに冷たく言い放った。

「約束は破られた事はないっ……でも、嘘をつかれた事はしばしあるけど」

「子を思つ親のちよつとした愛のあるお茶目な嘘じゃない」

相変わらず状況を把握できていない母親がサラリと的外れな答えを言う。

無責任な母親の回答にワナワナと身体を震わせている莉亜。何かを溜めている様子。

しばしの間、奇妙な沈黙。

沈黙を破ったのは一気に怒りを爆発させた莉亜。ズイツと顔を両

親の目の前に突き出す。

「どこが愛があるのっそのお茶目な嘘でね、散々苦労してるんだからね」

「まあまあ、落ち着きなさい」

同じ様に立ち上がった父親は莉亜の手を取ってから、真顔でヒッシと手を握りしめて言う。

「パパ達は神に誓って嘘はつかない」

手を握る父親はいつになく真剣。

言うまでもないが、娘は呆れた眼差しを当然父親に向けている。

誰にも気づかれぬ様にまた莉亜からため息ひとつこぼれるのだった。

(ハア

)

第2話 とめられない時間？

莉亜はつくづく思った。あの両親を信じたのが悪かった、とそう思いながら、携帯とにらめっこの後、肩を落とすのだった。

遠い目の莉亜は携帯片手に、ふと、数日前の事を思い出す。あんな事にならなかつたら、今空港にはいないし、まして、日本に行く事もなかったのに、と今更、怒りがこみ上げていた。

(やっぱり行くのやめようかな……)

往生際悪く、そんな事を考えている莉亜は、再び携帯をいじりながら両親からのメールをまた読み返してみる。

受信

FROM パパ

題名 行ってらっしゃい

200X/05/XX 15:19

日本にさえ着けばきつと大丈夫。

パパの友人の家でも君ならうまくいくよ。

ママも健闘を祈るわ。

と言う事だから、遠慮なく日本の生活を

エンジョイしなさい。

パパ達もその内日本へ行くよ。

P・S

言うの忘れてたけど、

向うの家のご両親はご不在なの。

ご兄弟だけで今住んでいるのよ。

きっと素敵な出会いがあるわ。

メールを読み終えて携帯を閉じた莉亜。携帯を力いっぱい握り締める。これでもかっと言うくらいに。身体がフルフル、小刻みに震えるのが自分でもわかった。

「そう言う事は前もって言うてほしいよ……また、騙されたあああ
あ」

大勢が行き交う空港のロビー中心で、ひとり絶叫する莉亜。

周囲の旅行者やら、ファミリーにビジネスマン達はギョと驚いたようだ。異常者にも出会ったかの様に彼女の周りをそそくさと避けて通り過ぎてゆく。

莉亜の近くにいた親子づれの子供が、母親に向かって、こんな事を不思議そうにささやく。

「あのおねえちゃん、大きなお声だね」ママ

「こらっそんな変な人指差ししちゃいけません！」

親子の会話が耳に聞こえてきた。莉亜は我に戻ると身体全体の体温が急上昇中。

(は……恥ずかしい)

身体の火照りがおさまらない内に、搭乗手続きのアナウンスが搭乗ロビー全体に響くのだった。

「どうしよう……あたしの乗る便だ」

戸惑う莉亜はその場でオロオロするばかりだった。

「連絡はしたのに。学くん、どうしたんだろう」

高原学の事を思っで心配と不安が募る莉亜。何度も周囲を確認するが、刻一刻と時間は過ぎて行く。妙に時間が早く過ぎる感覚に襲われる。

（もう、どれくらい、時間が 経ったかな）

今過ぎた時間の倍は過ぎた様な気がした。もはや、時間の感覚が完全に麻痺している、と感じるぐらいだった。

莉亜は影も形もない学の姿を、フロアから諦めずに何度も探す。それでも、彼の姿はなく、とうとう足元の荷物を掴んだ。限界時間まで、ギリギリ待っていたが、搭乗手続きへ向かうのだった。

第2話 とめられない時間？（後書き）

メールの雰囲気を出したかったので
本文で出てくるメールは挿絵ぐらいに
思っスルーして頂ければ幸いです。

莉亜が搭乗手続きを終えた丁度その時、空港のロビーに姿を現した。その人物こそが付き合っ^て1カ月のハツカレ、高原学だった。

高原学が今まで姿を見せなかつた理由は、昼前に受けていた講義の時刻にまでさかのぼるのだった。

レトロな雰囲気を持ったレンガ造の建物がドツシリと建っている。

ここは、莉亜が通っていた大学。

とある講義室では30代後半の男性が大勢の人の前で、黒板に小難しい事をスラスラ書いては説明している。それを大学生たちがノートへと真剣に書き写している後景。

その中には講義を受けている真面目な学の姿もある。そして、隣にはご機嫌な様子の藤堂由香が座っている。

しばらくすると、ソワソワする学を由香が横目で彼の様子をうかがうのだった。何度も時計を見て、落ちきのない様子。

ご機嫌だった由香の表情に異変が生じ始めていた。眉間のシワが文句言いたそうな感じに、ドンドン深く刻まれていく。

由香はだんだんイラだつてきたのが抑えられなくなっている。

セミロングの髪を指に絡めては、クルクルと回し、黒板だけを見つめる。彼女は学と視線を合わす事なく、サラッと小声で言うのだった。

「あのコなら……もう、雲の上よ」

予期せぬ言葉が由香の口から、意表を突いて、飛び出すのだった。

「それって、時間が変更したって事？」

「さあ、詳しくわからないけど

そうなんじゃないの？」

「なんで、授業前に教えてくれなかったの？」

「それは……」

学の問いに一瞬言葉をつまらせたが、由香はそのまま話し続けた。

「どうせ遠距離になるんだから、今別れたほうが、楽よ」

「そんな事ない。僕たちなら、大丈夫だ。大丈夫……ぶ。だい、じよ

」

学が自分に聞かせる為、何度も同じ言葉を繰り返すが、少しずつ声がかすれて聞こえなくなる。

動揺する学の姿が、由香の胸を少しだけ苦しくさせるのだった。

「それにリアちゃんは、そんな人じゃない」

「彼女より、距離の問題。生身の人間に会えないと辛さだけが募つて」

学の顔を見た由香は少し躊躇ちゅうちゅうした。

その間を逃さないように、学が反論に出る。

「辛いけど……でも、僕は今の気持ちを大事にしたいんだ」

「そんな気持ち、大事にしたって　　すぐに、自然消滅する」

「君に　　君にそんな事決められたくないっ見損なつたよ」

軽蔑する学は、由香に怒りの感情が芽生えるのだった。

由香は学の視線にたじろくが、必死に彼を説得しようと試みる。

「それは貴方の事を考えてで、遠距離だとお互い、心もきつと離れる。今なら、まだ」

学は純粹で真っ直ぐな視線を由香に向ける。力強い口調で、言いきるのだった。

「僕は信じるよ

何があっても、リアちゃんを」

21?

何とも言えない複雑な表情をする学。彼の顔を見た由香も表情が曇るのだった。

「学……」

彼女は視線を学から、そらすと小さな声で呟く。

「さっきのは……嘘」

また、ポツリと呟いた由香。

「ホントは……予定　　通り、なの」

学は自分の目をしっかりと見る事のない由香の顔を覗き込んだ。自分から顔をそらしたままの彼女に声を荒げて責める。興奮して、由香の肩をめいっぱいの力で、わしづかみにした。

「なんで　　なんでっそんな嘘つくんだよ」

由香は学に今にでもすがりつきそうなくらいの勢いで、懸命に自分の誤解を解こうと必死に弁解するのだった。

「だって、このまま遠距離なんて曖昧な関係が続くと、傷つくの学だからっ」

「僕の為に……だって？」

「学が傷つくのみたくないのっ」

「だからって、勝手にそんな嘘を」

「学の為には嘘しかなかった」
「そんなの僕のためなんかじゃない！」

怒りに任せた学は冷たく由香に言い放つのがあった。すでに机にあった教科書やノートを荒々しく片付けては立ち上がる。

「ま、学？」

「予定通りなら、もう行くよ……」

「講義　　どうするの？」

「もともと途中で抜けようと思ってた訳だし。もういいだろう、急ぐから」

由香は立ち去ろうとする学に、尚もしつこく名前を叫んで引きとめる。

「ちょっと待って学」

何度由香に名前を叫ばれても学は何も答えなかった。無言のままその場を足早に離れる。

講義室には自分の名前を叫ぶ由香の音が響く、それでも講義室を振り返る事はなかった。

学は予定の時刻より遅く出た講義室をでると急いで空港へ向かうのだった。

それまで静かだった講義室はふたりのもめ事で、講義室全体の集中力がきれた模様。

大勢の学生たちはその騒ぎにノートを取るのも忘れてどよめきだっている。

無論、ここまで授業をぶち壊されて講師が黙っている訳がない。

「Hey you! Could I ask you to be a little more quiet」
(君たち! ちょっと、静かに)

学生たちのざわめきを一喝する怒声がマイクを通して、その場に響き渡った。

「I'm sorry」 (すみません)

騒ぎを起こした張本人、由香の弱々しい声が、静かな教室にヒツソリと響く。それで学生たちが落ち着きを取り戻したのか、すぐに講義は再開される。

由香はというと、音をたてない様に机の上を片付けていた。彼女の屈折した本能は学を追い駆けるべきだと感じ始めているのだった。

古びたキャンパスの階段を幾つも駆け下りながら、携帯を取り出した。器用に携帯のボタンを押している。電話を掛け終わると校内を走り抜ける。

やっと目的の場所、正門にたどり着く由香。しばらくして、一台の車がそこへ止まる。車は先程呼び出したタクシー。彼女が勢いよく乗車すると、運転手に行き先を指定した。

「To the airport」 (空港までお願いします)
「I got it」 (わかりました)

後ろを振り返った運転手は焦る由香の顔を見ると、ただ事ではない事を悟り、快く返事をした。

由香はドアが閉まると運転手の背中越しに再度話掛けた。

「Take the shortest way, please」
(近道でお願い)

「It's okay」(いいですよ)

運転手はハンドルを握ったまま再度返事をした。

サイドミラーとバックミラーで安全確認をして、サイドブレーキを上げ、PからDにシフトチェンジ。アクセルを踏んで車はやっと走り出す。

それまで順調に街中を走っていたタクシーだったが、空港に近づく事に渋滞で動かなくなってしまう事がしばしばあった。

由香はその度に後部座席で焦り、イライラする。それでもなんとか空港に辿り着くのだった

学はそんな事があつた為、結局見送りに間に合わなかったのだ。空港の中心で、莉亜が搭乗した後もフロアに独り立ちつくしていた。

(リアちゃん……)

「学っ」

誰かが名前を呼でいると、そう思った瞬間、声の方へ振り向く学。自分の方へ由香が駆け寄ってくると、小さく肩を上下させていたのがわかった。

由香のそんな姿を目の当たりにした学は、息を切らす彼女を見つめるだけだった。

「あ〜えつと　っ」

何も考えてなかった由香は、どう話掛けたらいいのか、わからずに言葉を詰まらせる。

「わかった。僕らの事が心配で来てくれたんだね」

由香はどごう理解したら、そんな答えが出たのか、理解にできなかった。それなのに、この状況の中で、見事に見当違いの答えを導き出した彼、余計に答えずらくなる。

由香の予想の斜め上をいつも人とはズレた答えで応えてくれる学。むしろ、ココで違つと答えてもよかったが、彼を混乱させても仕方がないので、平然を装い答えた。

「そうよ、心配で来たけど……何か文句でも？」
「いや、ありがとう由香ちゃん。意外と優しいんだね」

首をを左右に軽く振って答えた後、少し苦笑したような表情を浮かべる学。

「それより、間に合ったの？」
「……ううん、ダメだったよ」

悲しそうな表情の学にそれ以上なんて声を掛けていいのか、由香は分からなかった。

そもそもふたりの邪魔をしたのは、プライドの為だけに学を欲しいと思ったから。スタイル抜群で美人の自分をさしおいて、勉強だけしか能のない莉亜に告白したのが、ただ気に食わなかった。それなのに、今は学を見つめているだけで、何かが胸を締めつけて苦しくなるのを感じていた。その瞬間、自分の気持ちに初めて気づくのだった。

(この、あたし……が学を好き、になってる　って事?)

由香は自分の中で気持ちを整理しようとパニックっている。

学はそんな由香の気持ちに微塵も気が付かない様子。ただぼんやりと立っていたが、何も答えなくなつた由香に声を掛ける気になつた。

「ごめんね。こんな空港の中心で落ち込むなんて、やっぱりダメだね、僕」

「……学」

辛そうな学が可哀想すぎてみていられない由香。こんな時くらい

は優しく声を掛けないとダメだと感じるのだった。

「帰ろうよ、学」

「うん」

飛行機に乗って彼女の元に飛んでいきたいと願っていた。学はまだ動けずにいる。

「ここにいても、仕方ないから、戻ろう」

キャンパスに

黙ってうなづく学。うしろ髪を引っ張られる思いで見つめる搭乗口。当然、そこにいつも優しい笑顔の莉亜の姿はない。

「行こう、学」

学は目の前の搭乗入口を見つめたまま、由香へと無言で頷いた。

外を出た瞬間、空を見つめる学の眼差しには、空に飛び立った飛行機が見えるのだった。

第3話 最悪な旅立ちと出会い？

修正？？しました。

12 / 13

(前書

題名と内容を変更しました。

第3話 最悪な旅立ちと出会い？

修正???しました。 12/13

莉亜は搭乗手続きを終えても空港フロアに学がきていないか、何度も振り返る。

すると、間違いなく莉亜の視線の先には学が
彼の姿を確認した瞬間、他の搭乗客にゲートの先へ追いやられてしまい、結局は飛行機に搭乗するのだった。

乗り込んだ莉亜は座席を確認して、頭上の荷物入れに手荷物を収納して座る。そして、彼女は時間つぶしに飛行機の外を眺めるのだった。

莉亜が物思いにふけっている間、飛行機はトラブルもなく、空港を離陸する。

離陸から時間が経つと、外を見飽きた莉亜が、ふと隣にいる男性へ、視線を向けた。

隣にはチャライ感じの男性が座っていた。暇つぶしに気づかれないうつ、男性をなんとなく観察。全体的に少し長めの茶髪。肌はやや褐色ぎみ。特に目鼻立ちがハッキリとした美男子。そして、容姿や顔から判断すると同じ年代ぐらい、と莉亜が考えていたまさにその瞬間だった。

「あの、」

と、隣の男が声を掛けてきた。

予想できない出来事に、莉亜は動揺をするのだった。思わず、迷惑そうな顔をする。

「な、なんですか？ 何か用ですか？」

それまで、さわやかな笑顔だった男の表情が変化する。ピクッと片方の眉毛を上げた。

「愛想がない態度だな」

「ヘラヘラして、愛想がありすぎる貴方よりマッシです」

「俺がいつヘラヘラした？」

「今、してた様にあたしには 見えましたけど」

「俺のは愛想笑いって言うんだよ。まあ、アンタのその仏頂面よりはマッシだろ？」

「 貴方、女性には優しくしなさいって習わなかったの？」

「女性ね……それはそれは失礼、お嬢ちゃん」

それ以上返すだけ労力の無駄と感じた莉亜は、プイッと男の反対側に顔をそらすのだった。

「 ったく、可愛くない女」

座席に肘を突く男。呆れた表情で小さく呟いたのが、しっかりと莉亜の耳に届く。

「 ……なっ、」

莉亜が言い返そうとした時、制服に身を包んだ1人の女性が、彼女たちの座席の目の前に現れるのだった。

「あのお客様、お静かにして頂けますか？ 他のお客様が痴話ゲンカをつるさいと申されておりまして。もう少し、小さな声でお願い致します」

キャビンアテンダントは通路にしゃがみ、見事な営業スマイルで

やんわりと注意した。通路側に座っていた莉亜が申し訳なさそうに謝る。

「すみません」

「お願いしますね」

そう言って、笑顔を浮かべたC・Aが立ち上がる。彼女は自信に満ちた表情でさっそうと自分の持ち場に戻って行くのだった。

「あなたのせいで怒られたじゃないですか！」

「それはこっちのセリフだ」

「それにカップルって、誤解されて迷惑ですっ」

「オタクも迷惑かもしれないけど、こっちはそれ以上に大迷惑してるよ、誤解されてな」

「なっ……声掛けてきたのはそっちでしょ？」

「ケンカ売ってきたのはそっちが先だろ？」

「別にケンカなんか売ってません。それに」

莉亜は自分からこんな事を言ってもいいものか、と言葉を止める。そんな詰まる彼女の言葉をオウム返して聞く、チャラ男。

「それに　　なんだよ？」

モジモジして、口をゴニョゴニョさせる莉亜。視線を合わせる事ができずに、両手のひと指し指の先を何度もグルグル回しながら、落ち着いた様子のない態度。

「どうせ、ナンパでしょ？　だから、声掛けてきたんでしょ？」

「……はっ　　誰が？」

「だから……あなたが」

「誰を？」

「あたし を」

莉亜はとうとう自分の事を指してアピール。が、男の質問攻めにだんだん自信がなくなる始末。

痛い子を見るかのような慈悲に満ちた瞳の男。そして、うわずった声で一言。

「な、何をくだらない冗談、言ってるんだか」

男性の目が点になる。カチカチに固まった顔で、モジモジする莉亜を凝視するのだった。

「だって……現に声掛けられたし、」

「勝手な勘違いだな。声掛けたのは、今、アンタが思いっきり踏みつけてくれる俺の搭乗券取ってほしいから」

「へっ？ 踏みつけてる？」

とぼけた声の莉亜は自分の足元を慌ててみる。

「……ホントだ」

「わかって貰えたなら、さっさとそれをこっちに貰えないか？」

冷めた口調の男は無言で莉亜の目の前に手を出す。

搭乗券を拾うと恐る恐る目の前にいる呆れ顔の男性に手渡した。

「はい、どうぞ……」

ふたりの座席に不穏な空気が流れるのだった。

日本に到着するまで時間を、身体を休めるのに使う事にした。莉亜は数時間仮眠するのだった。

頭をコックリコックリと揺らしながら寝る莉亜。首筋や肩のコリを感じ始めるのと、同時にズッシリとした重量感のある重みも感じ始めるのだった。

(つてか……重い。確実に何か乗ってる 肩に)

莉亜が閉じた瞳を恐る恐る開けて見ると、肩にはあの男性の頭がある。

男性とこんなに密着した事がなく、緊張する莉亜。どうしたらいいのか、わからず、身体が硬直して固まるのだった。

莉亜はもう一度自分の肩を確認。すると、やっぱり男性の顔が肩に乗っているのだ。スヤスヤと気持ちよさげに眠る彼の顔をなんとなく、また観察する。

（まつ毛　　長いんだ。やっぱり、鼻筋が通ってて彫が深いな。男の人の割りに肌も綺麗）

こんな間近で、マジマジと莉亜は男性の顔を観察した事がなかった。もちろん、女性の顔も。ただ、脈が不整脈にあまりにも動くので、鼓動の速さに　　自分自身がついていけないのだった。完全に油断していた莉亜の耳に思いもしない声が舞い込む。

「なあに、見惚れてるんだよ　　俺の顔に。痴女」

片目を開けた男性が、莉亜の顔を見上げると、寄り掛っていた自分の頭を彼女の肩からどける。

莉亜はその瞬間、心臓が止まるぐらいに驚くのがあった。一気にその顔が真っ赤になると、餌をねだる金魚の様に音もなく口を動かしている。唐突すぎて、声が出ないのだった。うろたえながらも、なんとか自分の言い分を言葉にする。

「ななな何っ、バツバカな事言わないで下さいっ!」

「なんで俺が、いつの間にバカ呼ばわりなんだよ」

「へ、変な事言うから。ただ……あたしは頭が肩にあったから」

「それで……」

白けた瞳の男性。そんな彼の問い掛けに、当然　　莉亜の言葉は続かない。

「何も言わないのは自分に非がある事に気づけたんだな」
「気づいてませんし、それに非なんてないです」
「あるだろ。さっきの勘違いだった訳だから」
「さっきの事は、置いといて」

莉亜はこれ見よがしに何かを置く素振りを見せた。

「いや、置くな、置くな」

「思わず莉亜に男性が突っ込んだ。

莉亜はそれにもへこたれず、真面目な顔で話を続けるのだった。

「で、今は肩にのつかた事です」

「んっ？ 肩悪かったな。つい あんまり色気がないから、
気が緩んでね」

「 色気が、ないって」

「当機は只今着陸準備に入りました」

「お客様はお座席のベルトを着用をお願い致します」

「言われたく」

「当機は只今着陸準備に入りました。お客様はお座席のベルトを着用をお願い致します」

計算でもしたかのようにアナウンスが莉亜の言葉へと見事に被せてくる。繰り返されるC・Aのアナウンスが機内に響く度に、戦意喪失ぎみの彼女はしゃべる事を諦めて座席のベルトを大人しく装着するのだった。

第3・5話 USAより愛をこめて ?

色鮮やかな屋根をしたオシャレな家や真新しい高級・高層マンションがある街並みの中、そこにはひと際、古い家が建っている。

それは黒い瓦の屋根がトレードマークの家。他の一軒家とは明らかに違う雰囲気。今時の町並みについている家こそが莉亜の下宿する榊本家。

家の中の若い男性はもちろん泥棒ではなく、れっきとした家の住人。

二重の丸い瞳が可愛いらしい印象の好青年。

彼は茶髪のサラサラとした毛を少し揺らしながら、意味なく家の1階から2階を徘徊している。

何故か落ち着きがない。ソワソワした様子の男性は榊本良人。

良人は5分前に上った2階へまた上る。

2階には階段から続く廊下。

左右には廊下を挟む様にして壁がある。その壁にはそれぞれ左右3つのドア。そして、廊下のつきあたりにはもう1つのドア。

全部で7つある部屋から、迷わず良人はひとつの部屋を選んだ。

部屋はアメリカから送られてきた荷物がバランスよく配置されている。

そう、この部屋には片瀬莉亜の家具が既に設置済みになっていた。

たったひとりで良人が下心　　もとい、淡い恋心から、遙々

来る莉亜の為に夜中から朝方にかけてセッティングした。寸分の狂いもなく、彼の目の前にはキッチンと家具が並んでいる。

満足げにその部屋を見渡し、嬉しさを顔が自然と緩む。

「片瀬さん喜んでくれるかな？ くれるといいんだけど……」
「おい、良人。部屋見て何ニヤニヤしてんだよっ、気持ち悪いいな」

眠そうな表情の男性が眼を擦りながら声をかける。

彼の身体つきはサッカー選手を指摘している為か、良人よりガツ
チリとしている。

色黒でいかにもスポーツ青年と言う感じで男らしい話し方。
良人と比べると少し鋭い目。

そんな背後からの祐大の声に良人は驚くと思わず部屋から出てい
た。

音も立てずに背後に忍び寄っていた彼をいぶかしげに見る良人。

(いつから居たんだよ？ こいつ)

USAより愛をこめて？

「いや、別に俺は何も」

ドアを閉めながら良人は何食わぬ顔でシラをきる。振り向く彼の顔を見るなり、緩んだしまりのない口元を指差す祐大。

「良人っ、よだれっよだれ！」

「っえ　　って、んなわけないだろ！」

ツツコンだわりには自分の緩んだ口元をしつかりと腕で拭う良人。祐大はそんな彼をジト目で見ながら、呆れた様な口振で言うのだ。
「った。」

「どうせ、下宿にくる女の事でも考えてたんだろ」

「いや、別に考えてたわけじゃないんだ」

「よく言っぜ。朝から落ち着きなく、家中ウロウロ。ったく、うるさくてゆっくり寝られやしねえよ」

申し訳なさそうな表情で良人はチラリと彼の顔を見て謝る。

「それはごめん……」

「今からは静かにしろよな。うかれるのはお前の勝手だけど、いい加減にしろよ」

そう言っつて、何もかもお未透視だからなっつと、言わんばかりに祐大は口元をニツと吊り上げた。

「なんだよ、その何か言いたそうな表情は？」

「まあ〜な。良人……みなまで言うな」

「何をだよ?」

「さては、お前、惚れたな」

「ちち違う、違うんだって。な、何言っちゃってるの?」

「なんだよ、隠してんじゃねえぞ。誰でもわかるって」

「ちがつ　ただ落ちつかないんだ。ちゃんと彼女無事に日本に着くか」

「んつとにそれだけか?」

「そ、それだけだよ。し、しつこい奴だな」

(どうでもいい事にはやたらす、鋭い奴だな……こいつ)

感の鋭い祐大の目から、逃れる為、顔をそむける良人。それでも、どもる声だけはどうしようもなかった。

「そつそそれだけって訳でもないからな。リュ、龍も確か今日帰ってくるはずだろ?」

「……ついで、的な感じだよな　　龍の事は」

「つ、ついでじゃないぞ、念を押すけど。あ、あいつの事も俺は心配だよ」

「まっいいけど、俺にはどちらにしろ、どうでもいいからな」

祐大の冷めた態度に、彼の人良さげな表情が変わる。

良人は強い口調で言葉を発した。

「そんな言い方ないだろ。龍之介の事心配じゃないのか?　俺はふたり共心配なだけだよ」

「俺はお前みたく、人間ができてねえからな。他人を心配できるよ
うな人間じゃねえよ」

眉間にシワを寄せて険しくなった表情をする祐大。悪意を込めた言葉で答えた。

「心配するのに人間性とかは関係なくない？ それに俺たち兄弟だろ？」

「そう言うところが、またうぜえんだよ いちいち」

「なんだよっ、うぜーって！」

廊下に良人の声が響くと、彼らが立つ部屋の向かいからドアを開ける音がする。

ふたりは音の方を振り返る。

ドアから顔を覗かした男性が、迷惑そうな表情にメガネをかけて言うのだった。

「……静かにしてくれかな。朝から近所に迷惑」

妙に落ち着いた話し方。ふたりとは格が違うぐらい物静かで逆に他人からは冷めた人間に思えるぐらい。彼は表情一つ変える事なく、彼らふたりに視線を送る。

USAより愛をこめて？

「ああ、悪い。兄貴」

祐大に続き良人もドアから顔を覗かせる男性に答える。

「ごめん、慶太。朝からうるさかった？」

慶太と呼ばれた男性は祐大の双子の兄で、彼らは一卵性双生児。

祐大のほうは全体的に短めで左右の長さが違う髪形。

慶太のほうはインテリ風のオシャレメガネを掛けて、髪形は緩いパーマを全体的に掛けたフワっとしている。

顔が瓜ふたつでも性格、話し方、服の好みなど、他にも色々違う点があるが挙げればキリがない。

そんな双子の兄は顔だけ部屋から出して、彼らに皮肉っぽく言う。

41

「朝からそんなにもめる様な重要な事、ふたりにあるの？」

「いや、ない。ただ、こいつが朝からドタバタうるせえーしっ」

「だから、祐大っそれについては何度も謝ってんじゃん！」

「その方が朝からうるさいし、近所迷惑。くだらない争いはやめてくれよ」

「くだらない事じゃ……ないと」

「じゃっどれだけ重要な事なのか、教えてもらえるかな？」

「重要とかそういう問題じゃくて、コレは」

「なら、朝から子供じみた喧嘩やめれくれよ、ふたりとも」

「俺も？ 兄貴、含む事ないだろ俺」

ヘラツとした悪気のカケラもない調子の祐大をキツと睨みつけてから冷たくあしらう慶太。

「祐大、お前も同罪」

「へえへえへえへえわかりましたよっ兄貴」

減らず口の祐大を慶太が見事に無視する。彼は怒りの矛先を良人に。その目は苛立ちに満ちた様子。

「それから、夜中に模様替えはやめてくれよ。非常識、なおかつ迷惑だ」

「ホントっ昨日からうるせえーし、寝不足だ。その上 朝からコシだしな」

慶太に便乗した祐大はひとつひとつの言葉を嫌味を盛る。文句をココぞとばかりに得意げに浴びせた。

言うだけ言うと慶太は自分の部屋に引っ込んだ。

逆に双子へ文句を言いたげな表情の良人だが、言える度胸もない。

(いつも嫌な事は押しつけるくせに……今度の事だって、俺だけで)

この事がキツカケで片瀬莉亜の両親から手紙が来た日を思い出した。

USAより愛をこめて？

「んっ、この 手紙、確か……親父が言ってた女の子の」

そう言っつて、家の郵便ポストから一通のエアメールを取り出し、それを片手に足早と自分の部屋に向かう良人。

部屋に入ってからスチールパイプ製で造られた小さな机へと、迷う事無く一直線に向かった。

イスへ座ると丁度手の届く所に文房具が入ったカンカンに手を伸ばす。ハサミを取り出して封を切る良人。

「え〜と、何々。拝啓、突然のお手紙失礼致します」

手紙にはつらつらと達筆な字で、日本語の文章が書いてあった。

「私共は旧友であるお父様に今回の事ではお世話になり」

長々と書かれている文章をはしりながら、黙読していると、良人の目を引く文章が。それは娘を想う両親の想いが込められた文章。

彼女は頭が良く、他のお嬢さん方と比べても、遙かに愛くるしい娘なのです。ウブなのでしょうか、今までにボーイフレンドを紹介された事がありません。、そこまで読むと良人が手紙相手にツッコム。

「って、今時そんなウブな子いるのかなあ。それで続きはと」

手紙に視線を戻す。視線で文章をたどる良人。こちらで素敵な男性と巡り会ってくれると、親としても安心で、良人はさら

に読み続ける。

「ふんふん、それで何々」

娘の写真を同封したのをご覧になってみて下さいねっと、
締めくくられているのだった。

「なんて言うか　間違いなく、本人の許可を得てないな」

（悪意はないと思うけど、それがないだけ　余計性質が悪いだよ
なあ。こういうタイプの人たちは）

とりあえず、良人とは封筒の中を興味本位で覗いた。窮屈そうに
写真1枚入っているのを確認してから、それを引張り出すのだった。

「　期待はできそうにもないなあ……にしても、俺迎えに行かな
きゃならないし」

裏向けになった写真に視線をむけ、しばしの間考える。

（フツ　どちらにしても、過度な期待はできないだろう、な）

ひとり何か納得したらいく、頭を上下に軽く頷ずかせた良人。

「よしっ……いずれにしても会う訳だし。今なら幸い心のダメージ
は少ないはず」

意を決した良人は裏返った写真を表にする。瞳を何度も瞬きさせ
た。

写真は頭で想像した容姿とはかけ離れた女の子が写っている。

中年夫婦の間には黒髪の可愛らしく小柄な女の子が微笑む。それは幸せな家族をそのまま切り取った感じの写真だった。

想像していた以上の結果に、思わず良人は写真の莉亜を見る度ニヤニヤする。

「……超可愛いいい」

「USAより愛を込めて？」

机に倒れたまま良人が写真をニヤつきながら執拗にみる。

手紙の事など一切知らない慶太が玄関先から2階に聞こえる様に大声で今だ写真でニヤつく彼を呼んだ。

「良人っ下に降りてきてくれ」

慶太の声が余程大きかったのか、リビングでくつろいでいた祐大は部屋から様子見に玄関先へ出てくる。

「アイツ聞こえてるのか？ だいたい部屋に引きこもってさっきから何やってんだか？」

「何しているのかは知らないけど、呼んだらすぐ来てくれないと」

「兄貴、直接呼びに行く方がいいんじゃないのか？ 所で何の用なんだよ、良人に？」

「ああ、それが……」

困ったような顔を見せる慶太は玄関のドアの方へ行くと、音をたてながら引き戸を開けた。

玄関の先の道路に1台のトラックが止まっているのが祐大の目に映る。

「なんだっなんだ？」

間の抜けた声で祐大は外から視線を慶太に向け直して訴えた。

「……親父が言ってた下宿人の荷物らしいんだ。で、さっきから道路のところで待ってもらってるんだけど」

「適当に運び入れてもらえばいいじゃん。何も良人に頼まなくても」
「運び入れる部屋がわからないから、わざわざ呼んだんだよ」

「なるほどな」

「しょうがない奴だな。ひとが呼んでるのに」

慶太が玄関をそう言って見上げるとつられて祐大も階段をみた。

ニヤつきながら良人が階段をやっと降りてきた様子。

良人の緩んだ口元が視界に入った祐大は気に食わない様子。彼が階段をおりきつた所で睨みつける。

「何ニヤついてんだよ、気持ちわりいな おめえは」

「べ、別になんでもないよ。でっ、用って何？」

「下宿人の荷物頼んだ。今から勉強するから、静かに運び入れてくれよ」

「はっ？ 荷物……って、どこに？」

「外のトラック」

慶太の言葉の意味がわからない様子の良人は困惑気味に言葉を繰り返す。

「トラックって……」

「だから、外つってんだろ。外見ても、ホレっ」

玄関外を指差した祐大に促されて良人が渋々玄関を出ると、3人程筋肉隆々のお兄さん方がにこやかにこちらを見ている。その光景に呆気にとられたまま固まっている良人。

「良人、頼んだぜ」

祐大の声でハッと振り返る良人。何食わぬ顔のふたりは元居た部

屋に戻るうとしていた。

「って、おいつ待て。手伝うよね……ふたりとも」

「なんで俺らが手伝うんだよ。どうせ暇だろっお前は」

「暇って……」

「祐大と同じく。当然　暇な人間がするのが当たり前だと思う」

あまりの理不尽さに弱々しいながらも発言する良人。

「いや、なんて言うか……家にいるなら手伝ってくれてもいいよね？」

慶太がふと考える素振りを見せる。彼は左腕を横にした上に右腕の肘を置いて、軽く顎を支える。

考える様子をしばしの間うかがわせた。

「　　納得できないのなら、多数決で決めようか？」

「いやっ、もういいです……やります」

（多数決じゃ、意味ないだろ……てかつそれ……ただの数の暴力だから）

この時もふたりに諦めの境地に立っていた良人。

「おいつ良人っ良人っ」

良人の耳に水をさす声があった。その瞬間、ハッと時を戻される。どれだけ時が経ったのかはわからないが手紙が来た日の回想から一気に意識が現在に戻る。

「やばっまだ髪の毛もセットしてないよ」

良人は無造作な髪の毛に右手を伸ばし、左手にはシンプルな飾ありつけのない腕時計を見る。時間を見て慌てだす始末。祐大の前を通り越した彼はそのまま階段の方へ急いで駆け出した。急ぐ背中に向け大声で祐大が叫ぶ。

「おいっ俺も出掛けたからなっ戸締りしとけよ」
「わかってるって、やっつくから」

階段を急ぎ下りながら適当に返事だけを残し、祐大の視野から一瞬にして消える良人。

廊下で立ち尽くす祐大は呆れた顔で相変わらず頼りないと改めて認識した。

(肝心なところが抜けてるよな、アイツ)

祐大も仕度するのに部屋へ戻るのだった。

第4話 ティーのお時間ですよ？（前書き）

タイトル改名しました。

第4話 ティーのお時間ですよ？

機内は着陸準備にはいり、莉亜の頭上のランプが点灯する。それは座席の上に幾つかあるマークの中のベルトが点灯。着陸するといふアナウンスが流れ、機体は徐々に降下し始めた。

少しずつ滑走路に近づいては停止位置に何事もなく無事に着陸する。しばらく走り続け、機体はそのままゆっくりと速度を下げ停止した。

着陸した事がアナウンスされると、座席に座っていた人々が一斉に機内から降りる準備をし始める。

その中には莉亜の姿も。頭上の棚に腕を伸ばして荷物を取るが、手を伸ばした先のどこにも荷物が無い。他の搭乗客が彼女の荷物をどうやら奥に押し込んだようだ。

「まいつちやったな、奥まで行ってしまつて届かないよ」

何度となくチャレンジするが、棚の中でむなしく空を切る莉亜の手。

「やっぱり、ダメだあ〜」

困った顔の真横を太くてたくましい腕がニユツと後方から伸びてきて、いとも簡単に奥に入り込んだ棚の荷物を引きずり出す。

何もできずに視線の先を眺めていた莉亜。驚き振り返った背後にはあの男性が無表情な顔で荷物を持ち立っているのだった。

無言のまま男性が腕を莉亜の方へ伸ばす。彼女はまだその状況を理解できないらしく、身動きひとつできずにいる。

男性は何もいわず、莉亜の腕に荷物を無理やり押しつけ渡す。

唐突な出来事に戸惑っていた様子の莉亜も自分の腕の荷物を黙って受け取り、確認してから途切れ途切れに男性へ一言だけ発する。

「どうも……あり、が、と、う」

「礼ぐらい、もう少しかわいい笑顔で言ったら どうなんだ？」

「それはどうも」

男性に言われっぱなしでイラつく莉亜は苦虫を砕いた様な笑顔で答えた。

「うわっ、アンタの笑顔最悪だな」

莉亜の笑顔と言えはいいのか、微妙な表情を見た男性は続け様に同情でもするかのような口調で、スツと腕を組んだ。そして、次に不思議そうに軽く首をかしげる。

「どんな女でも一番かわいく見えるもんだろ？ まださっきの方がマッシだな」

「余計な、お世話です」

男性は自分から視線を外した様子のおつちよう面な莉亜をシゲシゲとみて、心に溜めた言葉を勢いよく噴射する。

「んつとにつ！ かわいげがないね、アンタ」

「それこそっ大きなお世話です！！」

（ホントっ嫌な奴っ！）

キツと男性をひと睨みしてから莉亜は捨て台詞を吐き捨てた後、小柄な体格をズカズカと機体を揺らしそうなくらいの足取りで機内

から空港へ飛び出して行くのだった。

ティーのお時間ですよ？

空港へはトンネルの様な通路が続いている。

機内出入口前にはズラリと人々が並んで外に出る順番を待っていた。

その列に従って莉亜も並ぶ。しばらく待つと空港へ続く通路からフロアに出て、入国検査の場所へと進んで行く。検査が無事終わると税関を抜けてからやっと荷物のあるフロアにたどり着くのだった。

搭乗者のトランクが乗せられてグルグル回転しているレール。

早速近づいて自分の荷物を探し始める莉亜。

何度目かのレールが周回し終わった時、赤色で光沢のある見慣れたボディーにグリーンのバンドが付いたクリスマスカラーに目を奪われる。

莉亜が家を出る時に目立つようにトランクをクリスマスカラーにコーディネートしておいたから、そのお陰で迷わず手に取る事ができるのだった。

トランクを手に莉亜がその場を去ろうとフロアから移動するも、無数の空港出入口に足が自然に止まる。予定では空港に迎えが来るはずなのに、今だそれらしい人影が発見できず。

莉亜はどの出入口から外に出れば良いのか、さっぱりわからず。さ迷い歩き疲れていた。もはや、口からでるのはため息と泣き言。

「全然わかんないよ……出口が」

疲れた様子の莉亜へと、男性が数メートル前まで接近していた。不適な笑みを携えた男性がクリスマスカラーのトランクを引きずる

彼女に声をかける。

「おい！」

「アア」

(ま、また……この人)

「アンタ、あと何回空港を周る気なんだ？ 随分、独りで楽しそうなんだな」

嫌そうな様子の莉亜を一蹴した男性。競歩選手みたいな歩き方の彼女を何処からか見ていたらしく、クスツと鼻で笑う。

「それよりっあたしに突っかかってくるのやめてくれませんっ！

何かしました？」

「んっあえて言ってもいいなら言うけど どうする？」

小バカにしたような男性の意味ありげな口調で、何が言いたいのか莉亜は察知する。

「もしかして、まだ機内の事持ち出すの？ だったら答えはNOっ！ 結構です」

男性から離れたい莉亜はその場を逃げようとするが、男性に進路を阻まれる。そのせいでぶつかった拍子にポケットの財布が落下。そのまま空港の床を直撃する。

莉亜の小さな肩がわなわなと震えだす。

「これはあたしに対して、なんの冗談？」

ピクピクと表情筋を動かす莉亜。引きつった顔で無理に微笑もうとするが、大きな黒い瞳だけは笑っていない。

「いや、冗談も何も アンタが俺の行く方向に突っ込んできただけだろ」

ティーのお時間ですよ？

中身は見事に飛び出しフロアへおもいおもいにコロコロと転がる。

四方八方に飛ぶ小銭をキャッチしようとするコミカルな動きをする莉亜を見た男性は横で腹を押さえて笑い出す。

「もうっつ笑ってないで散らかった小銭、貴方も一緒に拾って下さい」

「お、俺も拾うわけ？」

「そうっつ。こういう時は困っている人を助けるのが人の……優しさだと、思っんですけど」

「優しさ、ね……」

「なんですか、その 文句言いたそうな目は？」

「別に なんでもない」

「それとも人が困ってるの、見て見ぬふりですか？」

「俺もまあ、鬼じゃないんでね。協力させてもらうよ。でも

アンタの場合はその方が良さそうだけどね」

「それはどうも、ご協力ありがとうございますっ！」

男性に見られないように、顔をそむけて、ブーたれた顔をして、不満そうな莉亜。

ふたりは散らかった小銭を拾い集める。

見える範囲内の最後の小銭を男性が彼女のもとに届け渡す。

「これで終わりだと思うけど。本当に次か次にやらかすの好きだな、アンタ」

「それは……どうも」

(別に好きでしてる訳じゃ……ないんですけど)

とことん疲れたと言いたそうな表情をする莉亜。財布に渡された小銭を入れるのだった。

「これだけ迷惑かけられたら、礼でもしてもらわないと割りに合わないな」

「お礼って程の事もないと思うんだけど……」

「こういう時はお礼するのが人としてのマナーだと、思うね」

「はいはい。それで、どんなお礼をしたらお気に召しまして?」

「余計な運動もさせられた事だし、喉も渴いてるから飲み物でも頂こうか」

男性がそっぴいながら指差した方向に雰囲気の良いカフェがある。

カフェは透明の壁に沿ってズラリとテーブルや座り心地の良さそうなソファがいくつも並んであった。

莉亜がその内の出入口から一番手前の小さなテーブルの上に荷物を置いて席を取る。

なんとなく透明な壁に視線がいく莉亜。壁はプラチックの様な素材で造られていた。フロアの様子もよく見える。

お陰で、莉亜は透明の壁を熱心に穴があく程突っ立ったまま見入る。

(もしかして……ここに居る人達からさっきの私の姿見えてたのかな?)

そんな事を考えている莉亜に男性が座るように促す。そして、莉亜の注文を聞いてからカウンターへと飲み物を買いに行く。

少し火照った様な身体を深く腰掛けて座る莉亜。ソファアの艶々

した革が冷たくひんやりしてちょうど良い感じに気持ちがいい。

モスグリーン色のソファアが落ち着きがない莉亜のお尻を優しく包み込んでいる。ソワソワしながらカフェの様子をあちらこちら見渡す。

莉亜の視線の先には不思議な光景が。十数時間前、飛行機に乗る前は全く関係のなかった人とカフェに来ている。つまりは、何も知らない男性、と。

ティーのお時間ですよ？

ふたつのカップを乗せたトレーをテーブルに置くと男性の方から莉亜へ話を切り出してきた。

「で、アンタ旅行か何かで来た訳？」

「何故、そう思うんですか？」

飲もうとしていたカップをテーブルの上に置くと逆に尋ね返した莉亜。

迷いなく男性はシラっとした瞳で、莉亜の顔を見て答える。

「同じ場所ですろろろしてたら……誰でもわかるだろう」

「それって、私をずっと見てたって事？」

「んっ見てた訳じゃない　俺が居る場所に何度もアンタが現れてたけどね」

男性の言葉に莉亜は何も答えないで、ムツとした表情へ無意識となる。

(なんだ、もうわかってるんじゃない。わざわざ尋ねなくても)

黙ったままの莉亜の姿で、彼女が答えなくとも質問の答えを察知した様子の男性。

「否定しないって事は凶星だな」

「べ、別に貴方に言う必要もないでしょ」

「だな、俺も特に興味はない。世間話だ　ただのね」

「一応、父親に知らない男には気をつけるって、言われてるもので」

「ほお、パパの言付けを守ってるって訳か。それは懸命だな、お嬢ちゃん」

言葉とは全く裏腹な表情で、皮肉を皮肉で返した男性の顔が無表情な顔から満足気に変わる。

莉亜はその男性の言葉と満足気な表情に力チンっときた様子。

（おっお嬢ちゃんって、ヒトが一番気にしてる事、なのに）

男性の嫌味を心の中で受け止めては、またもピクピクと動く顔の筋肉を抑えようと、莉亜は冷静に一言だけ返すのだった。

「そ、それはどうも……」

皮肉の応酬を最後に会話がとまると男性はトランクとは別の黒いA4サイズのバックから一冊の本を取り出す。本には本屋で買った時のままカバーがついてあった。

目の前の莉亜には気にも留めてない様子で、男性は本をお構いなく読み始める。

しばし、ふたりの間には沈黙が続くのだった。

そして、沈黙を破ったのは莉亜でもなく男性でもない、どこからともなく流れ出したメロディ。

それは莉亜の傍で鳴っていたが彼女にはきき覚えのない機械音。音に反応したのは男性で、彼は鞆からある物を取り出す。手にしたのは折りたたみ式の携帯電話。携帯を開き、メール受信を確認した様子の彼がおもむろに鞆に手を伸ばすのだった。

「悪い、俺はもう行くから。飲み物サンキューな」

それだけ言うと男性は立ち上がりざまにテーブルの上の自分の本やらを鞆に片付け始める。

何が起ったのかわからない感じの莉亜が、ソファから立ち上がった男性へとりあえず質問した。

「あの、何かあったんですか？」

「いや、別に、仕事なだけ」

「ああ。携帯、仕事の連絡だったんですね」

「そう、それじゃあな。知らない男にはくれぐれも気をつけるよ、お嬢ちゃん」

そう言うと男性は莉亜に皮肉を返す間も与えず、カフェの出入口付近に移動した。

(ホントにつ最後まで嫌味な人！)

第5話 NO・1の覚悟？（前書き）

ここから第5話に変更しました。

10/26 chocco

第5話 NO・1の覚悟？

カフェを後にした男性は人気ない静かな場所に移動する為、空港から出る。

男性は先程の落ち着きぶりはどこへいったのか、ソワソワ落ち着かない様子で、比較的静かな道路で携帯を取り出した。携帯画面にはメールのマークが1通の表示。

男性がメールを開けてみると、期待していた相手とは違う相手からだった。

「良人のメールか……」

落胆した男性はメールにサツと目を通すだけで、返信もせず携帯をとつと片付けたようとした時、手に持った携帯からメロディが鳴る。タイミング良く今度は電話の着信。彼はうっとうしそうにボタンを押して、電話に出る。

「もしもし、龍之介？」

「もしもし、俺だけど。良人か？」

「うん、もう空港に着いたよ。どこにいるの？」

「今空港の近くの道路にいるから」

「わかった、こっちは空港の駐車場にいるよ」

「OK、そっちにいくから、待っていてくれ」

「了解」

しばらくして空港の駐車場で待っていた良人の目に人影が。遠目に見ても目立つ服装に髪型。

その動きのある無造作ヘアーに綺麗に流した長めの茶髪を揺らしながら現れた。

服装の方は到底良人では着こなせないようなファッション。

白い柄物シャツに黒い細ネクタイをして、黒い面パンに白いベルト。モデルのようなスタイルに身のこなし。

その男性の身なりで誰なのか確心できた良人は少し遠目にいた彼の名前を読んで呼び寄せた。

「龍っ！」

龍と呼ばれた男性は榊本4兄弟のひとり、榊本龍之介。

名前と呼ばれた龍之介が声のする方に視線を向ける。良人が大げさに腕を伸ばし振って、アピールしているのがわかった。

「待たせたな、良人。荷物はこれだけだから。俺、仕事に行くから」

龍之介が旅行の荷物を良人に差し出す。

受け取った荷物を車に積み終わってから龍之介の方を振り返る良人。

「うん。俺も下宿しに来た彼女迎えに行くよ」

「なら、話は早いな」

「じゃあな、龍之介」

「ああ」

お互い話終わると別れの合図をして、別々の方向に歩いて行く。

良人は莉亜が待つ空港の方へ。地下からエレベーターに乗って空港のフロアへと。

龍之介は仕事に向かうため空港とは反対の方向へ。しばらく見慣れない道を行くと最寄駅に着く。改札に切符を入れると電車に乗って仕事場へと向かう。

窓から流れる景色をジッと凝視したまま、電車に揺られる事、数十分。

龍之介の目的地にへ到着。彼が電車を降りて駅を出ると辺りは薄紫色に染まっているのだった。

NO・1の覚悟？

繁華街へと着く頃には更に太陽が沈み、暗くなっていた。

暗闇の中、無数のネオンが美しく、そして妖しく光輝く。通り沿いにはスナック・キャバクラ・風俗やらが、たくさん建ち並んでいる。中には必死に客を呼び込みをしている店もある。

そんないつもの後景をかわしながら、龍之介は自分の勤めるホストクラブを目指す。

ホストクラブの建物が見えると、関係者入口がある裏側へと回り込む。

裏口から中に進むと龍之介は更衣室のドアを開けたのだった。

灰色の2段ロッカーがいくつも並んでいるそこには龍之介程ではないが、そこそこの美男子が着替えているところに、龍之介が挨拶してから更衣室に入って行く。

「おはよう」

数人の後輩ホストらしき男性が次から次に気合の入った声で挨拶をする。

そのうちのひとり、ホスト君Aが不思議そうな表情で龍之介に声を掛けた。

「あれっ今日は同伴出勤じゃないんですね？」

「今日はちょっとね」

ロッカーから視線をホスト君Aに向けるが質問に答えるとすぐに視線を戻す龍之介。

「珍しいですよね」

ホスト君Aはよっぽど龍之介がひとりでお勤してきた事が信じられない様子。

龍之介がローカーにまた手を伸ばし、自前の服を店様の衣装に着替える。ボタンをひとつひとつかけながら、首を傾げる。

「そうか？」

既に着替え終わったホスト君Aが龍之介の着替える近くで、尚も食い下がる。

「はい、だって俺が知る限りはほとんどお客様と一緒にじゃなかったすかぁ」

ホスト君Aの言葉に反応する男がもうひとり。

「そういえば……」

そう言いながら、この会話に参加してくるホスト君B。何やら思い出した様子。

「確かによく同伴でお勤が多いっすよね」

「まあ たまにはそういう事もあるだろ」

ロッカーからネクタイを取り出し、内側のロッカーの扉にある鏡をみる。結びつけ終わってからブランド物のジャケットの袖に腕を通す龍之介。ジャケットを両手でピンと張る瞬間、気持ち引き締まるのだった。

「それより、お前らっ」

着替え終わった龍之介が気合のこもる声でホスト君たちに声をかける。いつになく気合が感じ取れる龍之介の声に身が引き締まったような彼らは敬礼でもするかのような返事。

「はいっ」

「今日もヘルプ頼む。俺がいない席でのお客様のフォローしっかり頼むぞ」

「もちろんっ任せて下さい！」

「俺がNO1なのはお前らのフォローがあつての事。だから、これでも感謝してるんだ」

ホスト君たちにねぎらいの言葉を言ってから、ポンつと軽く片手でそれぞれの肩に触れる龍之介。

「そんな俺らの憧れなんすよ。龍之介さんは」

何処か自慢げなホスト君たちの顔を複雑な表情で、黙って見守る龍之介だった。

(憧れ ね)

NO・1の覚悟？

煌びやかで輝きに満ちて、天井へと散りばめられたシャンデリアが吊り下げられている。そう　まるで中世のお城を思わせる程、ゴージャスで夢の様な空間がロッカールームから埃っぽい廊下を進んできた龍之介の視線の先にある。

壁や床は大理石を使用。もちろん、フロア全体にはアンティークを思わせる様な豪華なテーブル・ソファも無数に存在しているのだ。つた。

普通の生活をしている人間ならば、ため息が出そうな程の別世界。

ホストクラブというのは　簡単に説明すると女性をお客の対象として男性版キャバクラ。ホストによっては店外でお客様と連絡を個人的に取り合い、店と一緒に出勤をする同伴出勤や店が終わってから一緒に過ごすアフターとか、人気ホストの手助けや場継ぎなどの補佐的な役割をしているヘルプがある。

フロアでは仕事始めの朝礼が始まるうとしていた。他のホストと同じ様に龍之介も、煌びやかなお客様用フロアに並ぶ。

「みんな、今日もしっかりと稼いでくれ。今週も龍之介が売り上げNO・1だ」

マネージャー（店の責任者）が何処となく嬉しそうに言うとフロア全体に観衆の声と拍手が響く。

「今日もにぎやかなようですね」

突然男性の声が、マネージャーの背後にいつの間にか長身で三代前半のグレーのスーツを着た男性が、スラリと立っている。斜め後ろ横には20代中盤くらいのキレイで清楚な女性がたたずんでいた。

「オ、オーナー、高科オーナー。これはこれは、今日はなんのご用でございますか？」

「自分の店に来るのに理由がないと来てはいけませんか？」

「いえ、そうではないのですが……」

マネージャーが言葉に詰まるとオーナー（店の所有者）と呼ばれた男性はフッと嫌味な感じで微笑む。

「近くに来たものですから、寄ってみたのですが」

「今日は奥様も一緒で。今日は一段とお綺麗で美しいです」

「ああ、たまの休日で一日一緒に珍しく過ごしているのですよ」

にこやかな感じの高科は傍にいる女性に視線を向け、まるで名前を慣れ親しんだ人と呼ぶ様な口振で声をかけて見せる。

「なあ、ちさと」

そのオーナーの様子とは裏腹に呼ばれたにも関わらず無言のまま、返事をしようとしてもしない女性。

「今はどうやらご機嫌ななめのようなのでね」

「はあ……」

気のない返事をしたマネージャーがふたりの様子に戸惑いの色を隠せない模様。

NO・1の覚悟？

ちさとの態度はいつもの事で、気にも留めていない高科はそれ以上彼女の事に触れる事はなかった。

この場の嫌な空気を変えたいマネージャーが額の汗をハンカチで拭いながら高科へ声を掛ける。

「オーナ、今回もこの店がどの店舗よりも売り上げが良くてですね……」

それ以上言葉が出ないマネージャーの唇からはうるおいが無くなって、喉はカラカラの様だ。

静かなフロアにはマネージャーの生唾を飲み込む音だけが響く。

「この店舗にとっても優秀なホストがいるとききましたが」

「そうですね、オーナー。榊本龍、のす」

得意の話題に飛びついたマネージャーが、龍之介の名前を言おうとした瞬間、何かに気づき、表情が凍りつく。

口ごもるマネージャーに会話の続きを言わせようと、白々しい態度の高科。

「どうされたのですか？ 遠慮せずにその先を話して頂けませんか？」

マネージャーは自分へと発言を促す高科を横目にチラつと見る。尚も声が出ず、また生唾を飲み込むだけ。

「まあ いいでしょう。貴方が何を言おうとしていたかはわかり

ますよ。私も一応ココのオーナーですからね」

冷静かつ無表情な顔の高科が、嫌味な口調で凍りついたままのマネージャーに代わりに発言する。

「そ………そうですか、オーナー」

「一番売り上げに貢献しているのが榊本龍之介と、言いたかったのでしょう。それじゃあ、今後もせいぜい頑張ってくれたまえ、榊・本・龍・之・介くん」

先程、ちさと と、呼ばれた女性はその名前に反応しては、ハツと顔を一瞬変化させた。

ちさとの表情を高科が横目で確かめ見ると、何かを核心した様子。険しい表情の龍之介が高科の顔を睨み、誰もがわかるくらい、明らかに彼を敵視する。

「はい、頑張りますよ 高科オーナー」

龍之介には言葉をかける事無く、面白くないという様な表情の高科。

「行くぞ」

その場に居るの事が苦痛に感じたのか、眉間にしわがよる。一緒にいる数人を引き連れ、高科は気に入らないといった感じにその場を去って行くのだった。

突然の出来事にマネージャーはボー然と立っていたが、咳払いをしてから、その場を仕切り直す。

「んっ……急な事だったが、これから開店だ。それぞれしっかりと頼むぞ」
「はい！」

ホストらは全員が声を揃えて息ピッタリに返事をする。それぞれが開店準備をするのに各自準備し始める。

NO・1の覚悟？

開店すると店はいつものように満員で大盛況。そんな中、ホストの待機場所で暇な2名が噂話に夢中の様子。

「今日のマネージャー気の毒そうだったな」

「そうっすね。そう言えば、マネージャー高科オーナーって言うてたっすけど、もしかして、あの高科コンツェルンの御曹司っすか？」
「ああ」

先輩ホストは視線を左右に泳がせて周囲を確認してから、新人の耳傍まで寄ると声のトーンを落とす。

「大きな声じゃ話せないが 高科夫人とココのホストがデキてるんだよ」

「えっじゃあ、今日来たのって、それを確かめる為っすか？」

「かも、知れないな」

後輩はゴクツと喉をならしてから、質問した。

「でっだ、誰っすか？」

「龍之介さんだよ。この店の連中は、みんな、薄々気づいてるけどな」

「そっなんすか？ 知らなかったっす」

「お前は新人だから、仕方ないさ」

無駄話をしているヘルプたちを、いつの間にか、マネージャーが睨んでいるようだ。眉間にしわをよせ、ヘルプたちの所へ近づいてきた。

「おい！ おまえら暇ならヘルプにでも入れ。無駄話ばかりして
るんじゃない」

「はい！」

「ヘルプですね」

それまで、余裕だった彼らは一斉に立ち上がる。

ふたりの顔はさつきまで緊張の文字すら、うかがえない表情だったのが、一瞬で凍りつくのだった。

マネージャーはそんなヘルプたちを引き連れ、龍之介のテーブルに来ると耳元で用件を告げた。

「マコト、あちらからもご指名だ」

「はい、わかりました」

龍之介が小声で返事をする。手に持っていたグラスをそっとテーブルに置いた瞬間、横にしな垂れがかつていた年配の小太りな女性が、何か察知するのか、甘ったれた声を出す。

「あらあゝマコちゃん、私を置いていくさあますかあ？」

煌びやかに着飾った服に身を包んだその女性はふくよかな体を立ち上がろうとする龍之介の太くて血管の浮き出た腕にグイグイと無駄な贅肉を押しあてながら引き止める。

「すみません、ですがご安心を。戻って来るまでこいつらがお相手
しますので」

龍之介の視線の先には彼程ではないが、美形のヘルプたちが傍で待機していた。

席から離れようとする龍之介を恨めしそうな眼で見つめるマダム。そのすぐ傍にいたヘルプたちが視界に入る。

「まあ、この子達もなかなか、カアイイじゃないのお」

「はい、かわいがってやって下さい。マダム」

龍之介は高価な指輪をいくつもしているマダムのプニプニとした手を、やさしく手に取る。そして、手にではなく頬へ軽くキスをした。

「それではマダム、少しの間、失礼致します」

「もうマコちゃんったら、うまいございますね〜ピンドンとか、一番高いお酒頼んでおくざあます」

「はい、お気遣いありがとうございます。では、マダム」

少し距離を取った場所から、一部始終見ていたヘルプたちは、龍之介の接客ぶりに感嘆の声を上げる。そこへ龍之介がすれ違いざま、彼らへ耳打をした。

「大事なお客様だから頼んだぞ、おまえら」

「はい!!--」

ふたりにその場を任せた龍之介。今夜、何度目になるかわからない指名のテーブルへと、また移動するのだった。

龍之介が忙しいと、それにつれ、店もお客へパフォーマンスするホストたちで、お客様フロアはドンドンにぎわやかになっていく。今日もまたイルミネーションが、繁華街のどこの店よりも輝きを増した。

いつものように夜が明けるまで、ホストクラブは、今宵も営業し

続けるのだった。

NO・1の覚悟？（後書き）

この話はこれで終了。

次回は第6話になります。次回投稿までお待ち下さい。

第6話 おいしいシュチュエーション？（前書き）

新しい家へからおいしいシュチュエーションに変更しました。 10

/ 1 9 2 3 : 5 3 c h o c o

第6話 おいしいシュチュエーション？

龍之介が去った後、取り残されたままの莉亜が、ソファアで口を半開きの状態で数回瞬きをする。

汗をかいたガラスコップに手を伸ばし、ストローを掴んだ莉亜。凄まじい勢いでミルクティーを飲み終える。気分がそれで落ち着くと時計を確認した。

「そろそろココでゆっくりしてる場合じゃないよ」

急いでテーブルを片付け始める莉亜。それが終わると、カフェの返却口に向かう。食器を返し終わった時、視線が外へ。そこから見えるのは空港の外部に出るフロア。

再び歩き出した莉亜はカフェを後にするのだった。

フロアに出る階段を下りて、しばらく歩いた莉亜。丸い大きな目にはひとりだけ目立つ男性が映った。

男性は手に布を持ち、それには何か文字が書いてある。この場所からだと遠く、よく見えなかったが、その事には気にも止めず、どんどんフロアを進む事に。進むにつれて、男性の持つ布の文字が、自然と読み取れてしまう。

それを見た莉亜は一瞬、自分の目を疑った。

目の前には 【片瀬 莉亜】の文字。

「う、うそでしょ……」

結構、恥ずかしいかもしれない、という思いが、莉亜の頭に駆け巡る。瞳が丸くなったまま、一歩もそこから動けない。出入口付近

にいた男性が、自分の方へ急ぎ足で駆け寄って来た。

「あの、片瀬莉亜さんですよね？」

男性はそう言って、自分に微笑んだ。悪い人ではなさそうな微笑みに、少し安堵すると答えた。

「はい……えっと、はじめまして。これからお世話になります」「こちらこそ、はじめまして。榊本良人です」

お互い軽めに会釈して、古典的な日本の挨拶を済ませた。起き上がりざまに榊本良人と目と目が合った莉亜。それとなく愛想笑いをしてみせる。

良人は生身の莉亜を目の前にして、釘付け状態で動かなくなった。

「あの、何かついてます？」

莉亜がいぶかしげに良人を見た。急に視線を逸らす。

「えっいやっ、何もついてないです」

「そう……、一瞬見つめられた様な気がして」「すごく笑顔がカワイイなって」

良人は莉亜の照れ笑いがたまらないのか、自分も同じように頬を淡いピンクに染める。

今しがた照れていた莉亜は、良人のきき慣れない言葉に驚く。思わず、彼の言葉をオウムのように繰り返した。

「っカワイイ……あたし、が、ですか？」

「あついやつ、その　　っハイ」

「その、えつと……社交辞令でも嬉しいです」

「いやっ社交辞令なんかじゃないよ、ホントに」

「ありがとう、すごく照れるなあ」

「そうだね　　ハハッ照れるよね」

良人は普段なら言わない事を言ってしまったて、後悔した。

(俺、完全にチャライやつだつて思われてる……よ)

話し終わると良人が促がす方向へふたりは空港から出る。

良人だけ空港下の駐車場へ移動する為、莉亜は彼に言われた場所で待つ事に。数分後、空港前の道路に車が止まり、車から降りて来た。

おいしいシユチュエーション？

「ごめん、お待たせ」

待っていた莉亜に駆け寄ると、良人が彼女の荷物に手を掛ける。

「この荷物は車の後部座席に入れるね」

「はい、お願いします」

コロコロと車に運んだ。キャリーケースを後部座席に入れてから、ふたりはそれぞれ乗り込んだ。

良人は運転席に。莉亜は助手席に乗り込んでシートベルトをする。

「今から、早くても2時間ぐらいに家に着くかな」

良人が車のドアを閉めながら、言うとエンジンをかける。

「2時間って結構遠いんですね」

「うん、もしアレだったら、どこかで休憩してもいいし。遠慮なく言って」

「はい、そうしますね」

車が走りだしてから、ふたりはとりとめのない話をしていたが、ネタもつき、車内には走行する車の音しか聞こえなくなっていた。緊張のせいかチラチラと莉亜を気にしながら、注意散漫の良人。沈黙に絶えられない様子の彼はMDの再生ボタンへ視線を向ける。

「あ、音楽いいかな？」

「えっ？はい、どうぞどうぞ」

車内に音楽が流れ出すと莉亜がおもわず口ずさんだ。

「恋なんて〜ンンンンンの〜シーズン〜、あっこれ知ってます
！」

「あっ知ってる？」

「はい、すごく有名な方の昔の歌ですよね」

「うん、そうそう。この歌結構好きなんだ」

「そうだ、最近の歌の流行ってなんですか？」

「うーんと、やっぱり」ポップかな。今はアジアのアイドルグループも結構人気があるかな」

「へえ。そうなんだ」

音楽を口ずさみながら、しばらくの間聴いていた莉亜は疲れがどつと押し寄せてきた。車の揺れがちょうど心地よくなると睡魔が襲う。うつらうつらしながらも、ギリギリ意識を保っていたが、どんな意識が薄れてゆき、そのまま夢の中へ。

目が覚めた莉亜が車窓から外を見ると、たくさんの家々が建ち並び街の中を走っていた。彼女は目を手でこすりながら体制を整える。

「あ、目覚めた？」

「はい、あたし寝ちゃってたんですね」

「うん、よく寝てたみたいだね」

「よだれとか、出てなかったですか？」

「うーん、ちよっと出てたかも」

「えっ、ホントですかっ」

まだ寝ぼけてる莉亜は良人の一言で目が覚めたのか、急いで自分

の口を指で触る。

「うそつうそつ冗談だよ」

「えっじょ冗談？」

「ごめん、ごめん」

「ふうん、結構いじわるなんですね、良人くんって」

少し不機嫌そうに言った莉亜の頬がプクツと少し膨らむ。

「あっそつだ、もうすぐ着くよ」

バツが悪そうな良人は話を逸らそうと、話題をすり変える。

良人に言われて、また車窓の方を見る莉亜。周りには家が程よく立ち並ぶ場所に、一戸建ての黒い瓦の大きな家が見えてきた。

莉亜が視線の先の家を指差して聞く。

「もしかして、あれそつですか？」

「うん、そつだよ、」

良人は答えてから、ハンドルを切る。曲がり角を曲がった。

空港から走行し続けた車はやつと榊原家の裏側にある道路に到着した。そこから車庫に入る。

車を止めて降りるとふたりはそれぞれ荷物を持って家の玄関に移動するのだった。

まだ誰もいない家の鍵を開けると、莉亜を玄関に招き入れる良人。

「今日からここが俺たちと一緒に生活する家だよ」

莉亜の目の前には、はじめてみる光景が広がる。

「ここが、これからあたしの住む家」

玄関に立ち止まった莉亜はマジマジと家の中を見て、これからの生活を思いながら呟いた。

おいしいシユチュエーション？

先に玄関をあがった良人が声を掛ける。

「どうぞ、あがって」

「はいっお邪魔します」

「それじゃあ、早速家を案内するよ」

先頭に立つ良人は得意げに家を案内し始めた。

莉亜は返事をしてからピツタリと彼の後ろにくっついて歩く。

「ここはリビングで。あと、向こうの廊下の入り口からはお風呂と洗面所にいけるので」

「はい」

「それとあそこはキッチンだから、好きな時にでも使って」

「はい」

「じゃあ、次は片瀬さんの部屋だね」

「あっ…はい」

ひと通り簡単に1階の部屋を案内すると2階へ。

頑丈そうな階段を上がると2階の廊下部分に通じている。

廊下を挟んで左右にある壁にはドアが3つずつあって、廊下のつきあたりには1つだけ別にドアがあった。

「あたしの部屋は？」

「片瀬さんの部屋はね、俺の部屋の隣の隣だからここだよ」

指指した部屋の前までふたりは移動すると、少し躊躇しながら、莉亜が聞く。

「ここ……入ってもいいかな？」

「もちろん、今日からこの部屋は片瀬さんのものだから自由に使って」

「はいっありがとうございます」

嬉しそうに莉亜がペコツと良人にお辞儀をする。

莉亜の可愛らしい姿を見て、みるみる内に表情が緩む良人。

恐る恐る部屋のドアを開ける莉亜。部屋にはアメリカの家と同じ見慣れた家具が並べられていた。

ホツとした様子の莉亜がゆっくりと部屋を見てまわる。

莉亜をみていると嬉しくなったのか、テンションが上がった様子の良人。夢中で部屋の話をし始めた。

「この部屋なんだけどさ。実はひとりでセッティングして、家の奴が誰も手伝わなくてさ、大変だったんだ。いや、気にしないで。大変だったとかは別にいいんだ。ってかいつもの事で慣れるし俺。それより……片瀬さんの事を思いながら」

良人は自分の苦労話を、ゆっくり間をためながら話す。最高潮に感情が高まると最後のセリフ共に莉亜を振り返る。

「って、あれっ。片瀬さん？」

振り向いた良人の目の前にはベッドで座った形のまま横に倒れて動かない莉亜の姿が。疲れ果てていたのか、彼女はベッドで寝息もなしにスヤスヤと寝ている。

そつと彼は近づく。ベッド前に音をたてないように座ってから、目の前にある無垢で無防備な寝顔を見るのだった。

「片瀬さんの寝顔、やばい可愛すぎるよ」

顔が緩みっぱなしの良人。その上、瞳が完全にハートになってしまっている。本人は何も気づいてないのか、間違いなく、誰が見ても彼を痴漢と間違っような状況。そんな状況の中、しばらく彼女の寝顔を彼は心ゆくまで堪能したようだ。

満足した表情の良人は優しく莉亜の身体を、布団の中へひとつひとつ丁寧になんて行くと行く。最後に掛け布団を彼女に掛けようと近づいて、布団を持って掛けようとした瞬間、今まで一番顔が接近した。すると、ある善からぬ事が脳裏に浮かぶ。今、この家には自分たち以外誰もいないという事が。

(この状況は男にとってはおかし過ぎる)

そして

……

少しずつ莉亜の唇に引く張られるのを、本能が支配するまま受け入れる。万有引力のごとく唇に引き寄せられていく。

(やばっ

理性が吹っ飛びそう。もう……止められない)

柔らかな唇に触れるか触れないかの距離で動きを止める。

莉亜の寝返りで、我に返った良人。腰が砕けたかの様にズルズル床に沈む。魂が抜けた様な様子で少しの間へたり込んでいたが、立ち上がり、フラフラと部屋を出て行くのだった。

第7話 ウリフタツな彼女

2階から意気消沈気味にドツと疲れた様子で降りてきた良人。気分変える為、キッチンへ移動する。キッチンの様子をドアから覗く。すると、中に誰か人がいる気配。

「あれ？」

人影に近づいたら、朝大学へ行った慶太がキッチンのテーブル近くにいます。

ついさっき帰宅したばかりの慶太はキッチンで、用事を済ませようと何かしていたようだ。

「あれ？ いつ帰ってきてたの慶太？」

「今さっきだけど」

そう言って振り返った慶太は、今度は何か思い出している模様。

「ん〜と、確か 誰かさんが女の子の寝込みを襲い掛けてた時かな」

「+ x # *」

「驚き過ぎだよ。別に何しようと思っただけど」

「う、うん……」

「合意の上での事じゃないとしたら」

「じゃないとしたら？」

慶太の言葉に喉仏が上下に動かし、ゴクつと生唾を飲み込む良人。そんな彼を冷たくみてから、自分の指で支える様な感じで顎を軽く触る。

「まあ 犯罪者になるだけだから」

「……」
「俺に迷惑かけない範囲なら、良人が何しように興味はないけどね」

「……」

慶太の一方的な言葉が深く突き刺さった。参ったな、という様子の良人。手で顔を覆い隠す。自分の軽はずみな行動にとてつもなく反省した。

「その、なんて言うか。つぎは気をつけます……ハイ」

「別にキミの問題で俺には一切関係ないからね」

冷笑する慶太は何事もなかったかの様にまた用事をし始める。

良人はあんまりにも恐ろしい慶太の冷笑に、身体が強張るのを感じずにはいられなかった。

「そ、そうだね ははっ」

その場にいるのがより一層恐く感じる良人。強張った身体を無理に動かして、移動しようと試みる。思う様に身体が動かせず、テーブルに身体をぶついたりしながらも、キッチンをやっとの思いで脱出するのだった。

良人の態度が可笑しくてたまらない慶太。笑うのを必死にこらえる。その表情を見られないよう、床に顔を伏せた瞬間、視線の先に何かあるのが、わかった。

ウリフタツな彼女？

落ちていた物を拾い取る。

「これ 良人の学生証」

手に取った瞬間、ヒラヒラと一枚の写真が落ちてきた。

「ん 写真？」

裏返っている写真を拾い見る。そこに写った女の子の姿を見て驚く。

写真には家族に囲まれて微笑む莉亜の姿があった。

「慶太、そこに学生証落としてない？」

廊下から良人の声。

声に反応したのか、青ざめていた慶太が素早く写真を学生証に挟み、もとの落ちていた場所に戻す。

「し、知らない」

探しながら部屋に入って来る良人。彼の目線の先に学生証が無造作に落ちているのを発見した。学生証を拾い上げてから慶太の方を見る。

彼はなぜか身体を小刻みに震わせながら、顔が強張っていた。

「なんか顔色悪くない？ それに震えてる様だし」

「別に……なんでもないから」

「そう。気分が悪いなら病院にでも行くといいよ」
「ああ、そうだね」

青ざめたままの慶太はひとことだけ言うと、一歩ずつ足取りを確かめるように、キッチンを出て行くのだった。

慶太のおかしな姿が良人の目に焼きついたまま消えない。その場で不思議そうにつぶやいた。

「あれ？ 用事……は」

部屋に来てから、複雑な顔つきの慶太は、良人が持っていた写真の事を考えていた。

あれからずっとベットに横になったままで、天井のどこかを見つめている。

おもむろにベッドから起きあがると机に近づく。鍵がつけられている引き出しを開けると、中にはひとつだけひっそりと写真たてがあるのだった。

慶太が写真たてを手に持ち目を細めた。その瞳には悲しみが満ち溢れている。

視線の先に写る少女は莉亜に瓜二つ。隣には少年が今までにないくらいの幸せそうな表情。誰がみても、幸福そうな未来ある少年少女の写真。

そんな写真に何度も語りかける慶太。

「キミの声が今は何も聞こえない……今日も微笑むだけだね」

少女の姿を何度もやさしく指でソツとなぞる。

慶太が写真に触れる度、微かに黒い瞳が寂しそうにゆらめく。そのまま心の奥にでもしまおうかのように、思い出がある大事な写真た

てを引き出してゆっくりにまうのだった。

ウリフタツな彼女？

部屋で落ちこんでいる慶太をよそにデリカシーのないもうひとりの双子が大学から帰宅。

玄関から帰宅そうそう、腹から声を出して、全力で叫ぶ祐大。

「おーい、もう迎えには行ったのかああっ？」

家中に響く声を静止させる為に良人も、また玄関の方へ全力疾走する。その奇妙な姿が、笑いのツボにハマった祐大。面白い余興でも見ているような気分になるのだった。

良人の気も知らず、大声で笑い出した。顔を歪めて、近づいて来る良人。

良人は自分の口元にひとさし指を立たせた。今だこの状況を理解していない祐大にすごい剣幕で注意する。

「シイイイイイ。うるさいっ！ 祐大もっと、声小さくしろっ！」

しかめっ面の良人を見た祐大が、不思議そうに玄関をあがった。

「なんでだよ？」

「慶太も体調悪そうだし、彼女も疲れて寝てるんだから」

「ふーん、どんな顔してるか見に行くか」

階段を上がり掛けた祐大の腕をわし掴み、自分の方へ引きずりおろす良人。彼は今、祐大を莉亜に近づけない事が、自分の使命だと思っこんでいる。

「やめろよ、そんなデリカシーのない事、女の子なんだから」

祐大が良人に掴まれた腕を、汚いゴミでもはらうがごとく力いっぱい振りはらうのだった。

「冗談だろっバアカ。何、マジにしてんだよっ」

半分呆れた様子の良人がふざける祐大を横目で見る。

(まったく、こいつ何処まで冗談なんだか……)

そんな事もあって、階段から離れる祐大。その後ろピタリと金魚の糞のように何処に行くのにも良人が執拗について歩く。

「鬱陶しいから俺についてまわるな」

階段の所まで用事を済ませてから祐大がまた戻る。

それでもまだ離れる気がない様子の良人。

「祐大の事だし、何があるかわからないから」

「マジで行く訳ないだろ。俺疲れてるから、部屋で休む」

「それならいいんだけどさ」

「興味ないから安心しろ」

「興味ないって言ってもこれから、共同生活が始まるわけだし」

階段を1段上るとピタリと止まって、うつとうしそくに祐大が答える。

「だから、それがなんだよ？」

「不自由な事もあるだろうし」

「で？」

「彼女、女性な訳だし」

「で？」

「俺たちは男だし」

「あのな、男と住む以上、何があっても文句は言えないぜ」

「いや、何かあったら困るよ、俺」

「んじゃ、お前が困らない様にしてやれよ」

その言葉を最後に階段を荒々しく一気に駆け上がる祐大。

「だからああああ静かにiiiiiiii！」

良人は遠ざかる彼を最後まで階段下の場所から見張るのだった。

第8話 秘恋 ヒレン

世間が眠りについた頃、龍之介もまた仕事を終えて帰る途中だった。

閑散とした繁華街を歩いて駅にひとり向う途中、目の前に一台の車が止まる。

この時間には少々不似合の車。黒光した車は高級車のマークもついて、いかにもお金持ちが乗りそうなベントだ。

車のドアが開く。そこから美しい女性が降りてきた。彼女は上品な立ち振る舞いにブランド品を身にまとい、セレブの奥様風。あの有名な高科財閥御曹司の妻、高科ちさとだった。

「龍くん！」

「ちさとさん、大丈夫なんですか？ 高科にみつかったら」

「大丈夫、高科が眠ったのを確認してから、屋敷を出たの」

「そっか。でも あの人は？」

車のそばに居る白髪の老人に視線を向けた龍之介。

黒い背広を来た小奇麗な老人が、龍之介の視線に気がつき、軽く会釈をする。

「あの人はあたしたちの味方よ。何も心配ないわ」

「では、奥様わたくしはさがっておりますので、御用があれば御連絡下さいませ」

「ええ、ありがとうございます。古谷」

お辞儀をした古谷がベントに乗り込むとそのまま車は暗闇に消える。

状況をいまいち飲み込めてない様子の龍之介にちさとが説明した

のだった。

「いつも彼が手伝ってくれていたのよ

龍クンに会うの」

「そう」

頷く龍之介は愛おしそうにちさとをみつめ、少しピンクがかった頬にやさしく触れる。次に艶やかなくちびるへ、そっと指でなぞる。彼女の身体をグイッと、自分の方へ引き寄せる龍之介。細く頼りなさげな身体を壊れない様に包み込む。

「龍クン？」

龍之介の腕の中で、小さく名前をただ呟く事しか出来ない、ちさと。

「ちさとさん、すごく会いたかった」

「あたしもだよ」

ちさともまた、龍之介に応える為、彼の身体に手をまわして、同じ様に力を込めて抱きしめた。

それから、ふたりのくちびるが重なり、息もできないくらいキスをする。お互いのくちびるが腫れ上がる程、何度も何度も繰り返し、くちびるをまじ合わせた。

どれぐらいの時間、ふたりは抱き合っていたのか

本人た

ちもわからなくなる程だった。

ちさとは大きくて広い暖かな龍之介の胸に、うずくまり尋ねる。

「龍クン、あのあと大丈夫だった？」

心配そうなちさとの顔に視線を落とす龍之介。

「なんで？」

ちさとも龍之介の顔へと視線を移す。

「色々嫌な目にあってないか、心配で心配で」

「それで……わざわざ」

「うん」

不安げな表情のちさとを、また強く抱きしめた。

「俺なら大丈夫だよ。ちさどさんこそ、高科に何かされてない？」

「あの後はいやミな事言われたぐらいかな。でもね、平気なのよ」「どうして？」

龍之介の胸に顔をうずめるちさどが、恥ずかしそうに答える。

「だって　　龍クンに会えるから、ガマンできるのよ」

「ちさどさん……」

ちさとへの愛おしい気持ちを抑えきれない龍之介は、抱きしめる腕の力がより強くなった。

そんな力強く抱きしめられた腕から、悲しそうな表情で、ちさとはそっと離れる。

「そろそろ、帰らなきゃね」

携帯を取り出して、ちさとは先程の古谷という執事に電話をした。数分後、また黒光りのベンツがどこからともなくふたりの前に現れ

る。

ベンツの運転席から降りてきた古谷が後部へ。後部座席のドアに触れて、音を立てない様、静かに開けた。

「奥様、お時間が。お乗りください」

「ええ。龍クン、また会いに行くから」

「ちさとさん、高科にもし何かされたら、いつでも飛んでいくから」

「うん、ありがとう」

古谷に催促され、ちさとはゆっくりベンツに乗り込む。背を向けて歩いて行く彼女を、今すぐにも引きとめたい衝動が走るが、今はただ龍之介には見送る事しかできない。

なぜなら、ある条件でちさとは高科の御曹司と結婚していたからだ。

ちさとの父親は事業に失敗して何億という借金をしていた。その借金を返済するかわりに御曹司と結婚するという条件だった。

それを知ったため、本来、事業を立ち上げるのに貯めていたお金を、今はちさとの為に貯めている。

第9話 やわらかな感触？

同時刻、目が覚めた莉亜は静まりかえった榊本家を徘徊していた。

「ノド渴いちゃった。下におりて水でも飲もうかな」

その言葉で始まり、暗闇を徘徊する事10分。キッチンに莉亜はやっとたどり着くのだった。

電気のスイッチを壁からさがす為、ペタペタと手の平で壁を触る。

「あつた」

莉亜がパチツと音を鳴らし、キッチンのスイッチを押す。部屋は電気で見える見るうちに照らされた。

キッチンは目が眩むほどの明るい部屋に。暗闇に目が慣れていた為、何度かマバタキして、光に目を慣れさせる。

目が明るさに慣れた莉亜はシンクに歩いて行く。近くに置いてあったコップを何気なく掴んで、水道水を注いだ。彼女はそれを一気に喉を鳴らしながら、飲み干した。

「プファ〜！」

ビールを一气飲みしたおっさんの様な声を出す。

口の周りを拭きながら、飲み終えたコップをシンクに置いて、キッチンを改めてうかがい見る。誰もいないはずの階段の方から、物音がきこえて来た。

「んっ？　なんか……物音が」

物音がきこえる方を莉亜は息を殺しながら、近づき見る。入口から顔を恐る恐る出す。そして、耳をすませるのだった。

「何も　きこえない。気のせいだったのかな」

暗闇を見つめたままの莉亜が、身体を震わせる。

（なんか　こわいかも）

「部屋にもどろう」

悲壮感漂う顔で、暗闇を心なしに莉亜は早歩きで歩く。一気に部屋まで戻り、自分のベットへ一目散に潜り込んだ。

（……お酒、クサッ）

莉亜は鼻に手を覆いながら、もう片方の腕を布団から伸ばす。その先にあったスタンドの紐をつかんだ。そのまま紐を引っ張って、灯りをつけた。

まだベッドの中では、お酒の匂いで、顔を歪めたままの莉亜がいる。お酒の匂いがたまらなくなって、下から一気に掛け布団と一緒に、彼女は身体ごと起き上がるのだった。

布団からでた莉亜の目に向かいの壁がとび込んだ。

スタンドの灯りで、壁にはもうひとつのあるはずのない人影が、浮かびあがっていた。その瞬間、榊原家中に、恐怖とパニックで悲鳴がとどろく。

人影はその悲鳴を聞くなり、目の前にいる莉亜に襲いかかる。も

み合つうちふたつの人影は重なりあい、バランスを崩してベットから落ちた。

家中にけたたましい爆音の様な音が鳴り響く。

（痛くない　　んっ何？　柔らかい、感触）

目をつぶっていたのをゆっくり開ける莉亜。

同時に部屋の扉も開く。

やわらかな感触？

「な、何してんの？ お前ら」

知らない男性の声に続いて、莉亜にとって聞き覚えのある声も聞こえた。

「か、か、片　　瀬さん、口が口が」

激しく動揺する声の主は良人。目の前の信じがたいシュチュエーションに、ショックが隠せない。その場で崩れる様に座り込む。

（な、何かのまちがい。そっそう、これは夢なんだ　　夢
だとしたら……）

「あ、悪夢だ……」

良人が言うとおりに、悪夢なのかもしれない。何をどうしたら、そんな器用なマネができるのか、人生初の体験を莉亜は思わぬ事故で済ましていたのだ。

「ング　　フング」

口がふさがった状態で、声にならない声を出す莉亜。真下にいる男性の唇から、自分の唇を必死にはがした。

キスの呪縛をなんとか解いたが、莉亜は放心状態。

男性は自分の身体からいつまでも動こうとしない莉亜に、シビレを切らして声を掛けた。

「重い　早くどいてくれ」

それでもピクリとも動かない莉亜。
今だ上に莉亜がいる為、うめき声のような苦しそうな声が、男性からもれた。

苦痛の声に反応する莉亜。真下にいる男性の顔をぎこちなく見る。その瞬間、瞳が一層丸く、いつもより大きくなった。

「　あなたはっ」

「ゲツまた、あんたか」

莉亜の顔が見えて、嫌そうに吐き捨てた男性。そして、馬乗りになっていた彼女を遠慮なく、身体から落とした。

落とされた莉亜は今だ部屋でしりもちをついて、座ったまま。
扉の所で良人と一緒にいる男性は、部屋にいるふたりをからかうような口振りで言う。

「来て早々、やってくれるぜ」

良人たちとは別に、廊下にはもうひとり男性がいる。
その男性が、冷淡な表情で言い放つ。

「確かに、ね」

聞き慣れない声の方を立ち上がり見る莉亜。

扉には良人以外にふたりも男性がいる事に気づく。　顔がそっく
りさんなふたり。

莉亜は不思議な後景にクリクリとした瞳をパチクリさせる。

「あなたたち、誰？」

莉亜の疑問に同じ部屋にいる男性が、扉にいる3人を指差し、ひとりひとりの名前を言い始めた。

「顔がそっくりな奴らは、右が祐大で、左が慶太。もうひとり」

「知ってます、良人くんでしょ」

「そうだ。それにこの家に住んでるのは、俺たち4人だ」

「俺たちって、まさか」

絶句した莉亜が言葉を失う。

第10話 大事な理由のわけ？

良人は莉亜がこれ以上ショックを受けないよう、慎重にゆっくりと話し出す。

「寝てしまって、言うタイミングなかったんだけど、片瀬さん俺たち一応兄弟で」

「そつ、良人が言う様に、俺はこの家の住人で神原龍之介」
「つて事は、何？ ココであなたたち兄弟と住むの？」

神原兄弟を順に見終わった莉亜が、自分を指しながら誰ともなく聞いた。

質問に答えたのは、だるそうに寄り掛かっていた祐大。

「まっそう言う事みてえだな」

「ム、ムツムリッ、4人つて……」

ワナワナと震える身体を自分の両腕で抱える様にして、力いっぱい首を横に振る莉亜。

龍之介がその様子に呆れ果てたのか、冷めた態度。

「それはお互い様だ」

「お互い様って、あたしは女の子だし、そっちは」

話を続けようと何か言葉を探すが、思い浮かばない莉亜は口ごもる。

何が言いたいのかを察して、莉亜の代わりに祐大が答えた。

「まっ4人もいるし」

野郎だしな」

祐大と莉亜の会話に、今度は慶太が理解できない口振りで割り込む。

「でっだから、何？」

「何って、理解できるでしょ？」

「理解も何も、問題ないよ。君がここに住まなきゃね」

「行く場所ないんです……ここしか」

「それは君の都合だろ？ 場所がないなら、住むしかないだろ？」

「あたしにとつて、そんなに簡単な事じゃ」

「じゃあ、出てくしかないね」

「だから、住みたくても、色々問題があるから」

無慈悲な慶太の態度に莉亜は悟った。これ以上自分が話しても、無駄だという事に。

ふたりの会話が止まったまま、話の出口がいつまでたっても見えてこない。

こうちやく状態を脱する為、榊原兄弟の誰かが、話を再開させる。

「色々って、なんだ？」

莉亜は声の主の方を見た。

声の主は祐大。今の状況を進行させる為に、疑問を投げかけた。

莉亜は自分が何を言いたいのか、最後のチャンスと思って、彼に続きを話す。

「だから 今は、襲われた……事」

「誰が？」

「あたしが、です」

「べつに、襲われてないだろ」

祐大の言葉で、莉亜は露骨に嫌悪感を出す。

「その目は節穴なの、それとも飾りもの？」

「いや、むしろ……お前が龍之介を押し倒した様に見えたぜ」

「あり得ないっ！ そんな風に見えたの？」

「少なくともここに居る全員、そう思ってるぜ」

「そんな

」

莉亜はそれ以上何も言えなくなった。

祐大に好き勝手に言われている彼女が、ふびんでしょうがない良人。

大事な理由のわけ？

「ふたりがもめる前に、張本人なんだから、何か言っておいて」

一方、龍之介も納得できない様子。それまで沈黙を守っていたが、良人の呼びかけで、口を開いた。

「お互い様　　だろ？」

「でも……あたしには大事な事で」

「あんたなあ、大げさだろっ。ちよっと、口と口があたってくらいに思えよ」

「そんな……思える訳ないじゃない」

無神経な言葉が、ワナワナと体全体を震るわせ始めた。

良人だけが莉亜のおかしい様子に気づいたようだ。

「あ、あの片瀬さん」

良人は慎重かつ刺激しないように、注意しながら話掛けたが、莉亜は涙目。

「……あな、達は、そうかもしれないけど。あたしは　　思えないのっ！」

良人はそんな対照的なふたりを交互に見ながら、内心ヒヤヒヤしていた。

「でっ思えないのは、なんでだよっ？」

「祐大、急かすなよ。彼女泣きかけてるだろ」

「悪かったな

それは」

悪いという言葉の割に、祐大は言葉とは逆の表情で舌打ちをした。

「気にしないで、ゆっくり話していいよ、片瀬さん」

「まだ した事ないの」

「だから、なにをだよ？」

「 ……スを」

莉亜が聞えるか聞こえないくらいの声で話す為、肝心な部分が聞えない。

思わず、榊原兄弟全員が耳を彼女の方に向ける。

「キス を」

莉亜のひとことで、一気にその場の空気が変わる。

榊原兄弟は、誰もが信じられない様子で、お互い顔を見合わせる。

みんな言葉が出ない模様。

莉亜ひとりを除き、誰もが絶句。

誰も何も言えないでいる。

重々しい空気の中、口を開く莉亜。困惑気味に声を出した、そこにいる人間たちの反応をうかがう為。

「何か」

「そう……言われてもな」

また、思い思いに榊原兄弟はそれぞれ顔を見合わせた。

「マジ、かよ」

「シツ祐大！」

良人がキツと祐大を睨み黙らせる。

「今の……が、まさか」

恐る恐る龍之介が、目の前にいる莉亜を見る。彼女に確かめるような視線を送るが、何も言わず、うなずくだけだった。

祐大はまだ理解できないでいる
ふたりの様子を見て
も。

「んな奴……いまどき、いるか？」

彼の隣にいた慶太が、首をひねると困り果てる。

「さ、さあ……俺に聞かれてもね」

「だよな」

「とにかく、これは俺たちの問題じゃないしね。龍之介と彼女の問題だから」

「首突っ込むほど、俺だって暇じゃねえよ。兄貴」

ふたりの会話で、重々しい空気が、少し変わる。

突然、良人が水を得た魚の様に、話し出した。

「とりあえず、片瀬さん、龍之介とゆっくり話し合った方が

」

「だな。良人の言う通りだぜ」

「お前にだけには言われたくないね、祐大」

龍之介の言葉で、祐大がわざとおどけて見せた。

外国人の様な振る舞いで、両肩・両手を上げると、すくんでみせる。

「ハイハイ、さようですかっ 邪魔者は退散すりゃいいんだろ」

第11話 きみを守る ?

廊下を進んで歩こうとした3人をつい呼びとめる。

「行かないで、下さい」

莉亜は不安げな声で、部屋から叫ぶ。

3人が振り返る中、一番後ろにいた祐大が、めんどくさそうな表情を見せた。

「なんでだよ？」

「そんな……話合っても何も、どうしたら

」

戸惑いを隠せない莉亜が、良人たち3人へ助けを求めた。

「キミ達の問題だろ」

慶太の適格な答えに、何も言えなくなる莉亜。黙り込んで、うつむくのだった。

心細そうな莉亜を察してか、部屋の中に戻る良人。そして、彼女の傍に行く優しい声でなだめる。

「じゃあ、俺はここにいるから、片瀬さん」

「う、うん。ありがとう良人くん」

会話を黙って今の今まで、聞いていたが、納得のいかない龍之介。冷たい目をして、皮肉を言い放った。

「ハッ俺は、野獣か猛獣扱いだな。そうになると、さしづめ良人はナ

イトって所か」

「茶化すなよ」

「別にそんな意味で、良人くんに住てもらっくんじゃ」

「そんな事は、どうでもいいけど」

龍之介のどうでもいい、の一言で、心がおれる莉亜。自分がちゃんと話そうと思ったのがアホらしくなるのだった。

莉亜は近くにいた良人も含めて、ふたりをドアの方へ押し出し始めた。

「で、出てって！ ふたりとも出てって下さい」

自分の部屋から追い出そうとなんとか開いているドアの方へ押し動かす。

何もできず戸惑う良人は、されるがまま、廊下に出された。

それでも龍之介は自分でもわからないが、追い出されまいと、なぜかドアの隙間から腕を挿んだ。その細い腕が怒りで震えている。

ドアの隙間から見えた莉亜の顔がこちらを見上げる。瞳には涙が溢れ、今にも流れそうになっていた。

「この期に及んで、まだ何かしようって言うの？」

「いや、そうじゃない　ただ俺は」

話そうとしたが、龍之介は言葉を止めて、莉亜の腕を放す。

「俺は……何？」

掴まれていた腕をさすりながら、龍之介の言葉を繰り返す莉亜。

ドアノブから手を放したおかげで、人が入れるぐらいにドアが開く。

莉亜はドアの傍に居る龍之介を睨みつけた。その顔が見る見るうちに青ざめる。

「ぎ、ぎもぢ悪い」

「何？」

「ヴっ」

酒の臭いが龍之介の口からもれる。慌てて口を手で覆った。何かが出そうなのを抑える。

青ざめきつた顔が再び莉亜の顔へと近づいてい来るのだった。

「まさか　？」

口の中で抑えとどめている物体がなんなのか、悟った。身をガタガタと小刻みに震えさせる莉亜。

「い、いやああああああ！」

オカマが叫んだかのような声が榊原家にとどろくのだった。

きみを守る？

想像していた事がいつこうに起こらないので、静かに目を開ける莉亜。おそろおそろ開けた目の前には、なぜか男性の背中。自分でも何が起こったのか、わからない。

「あっあれ？」

それでもまだ、莉亜は状況をイマイチ把握できない。

口を押さえて涙を流しながら、男は　　いや、良人が走って部屋を出て行くのだった。

気の毒そうに良人が出て行くのを見る莉亜。その先には祐大と慶太がいる。

今の騒動でふたりは彼女の部屋の前に戻ってきたらしく、祐大は他の誰よりも速く状況を、瞬時に理解する。そして、意味深な一言。

「良人に　　するとはな」

「俺もまさか、アイツが……あんな事をするなんて」

龍之介の口振りから、おぞましい想像が莉亜の頭に駆け巡った。それを確信に変える為か、思い切って口にする。

「ま、まさか　　口の中に？」

「自分の口を俺に押しつけたから、いろんな意味で……今、口が気持ち悪いんだよ」

オエっと、今も吐くマネをする龍之介。

そんな彼を横目に、慶太が答える。

「この部屋にもんじゃを吐くと、君が困ると思ったからじゃないかな」

「あたしが……困るから？」

「そういうバカなんだよ、良人は」

祐大が、今はなき良人の姿を思い、出て行った入口を見つめるのだった。

第12話 新しい日常？

「あの後、ゆっくり寝る事ができた、良人くん？」

莉亜が昨晩の出来事を気に掛けて、良人に声を掛ける。

朝日の光がキッチンの窓から入り込み、部屋全体を明るく照らしている。

寝起きで部屋が少し眩しそうな表情の良人。

「うん、ま〜なんとかね」

キッチンにあるテーブルへ、焼けたパンを皿に並べながら、良人は寝ぼけ声で答えた。莉亜も冷蔵庫から飲み物を取り出して3人分を用意。

朝ごはんの準備が終わると莉亜だけ座ると祐大を挟んだ状態で続きを話す。

「あの、昨日はありがとね、良人くん」

「いや、俺が勝手にした事だから、気にしないで」

「うん。優しいんだね」

「いやあ、そんな事ないよ」

莉亜の笑顔に良人は顔をだらしなく緩ませた。

朝ごはんの準備もせずにとただ座っていた祐大が、焼いたパンを片手に寝起きの悪さを発揮する。

「なあに、ニヤついてんだよ。気持ち悪いいな」

「見えてもないのに、変なこと言うなよ」

「お前の事だから、だらしない顔でもしてるのかと思ってな」

「そんな顔……してないよ、俺は」

「さいですか。ほんじゃ、朝からお熱い事で」

祐大はてんこ盛りの嫌味を、のし付けた言葉で、良人に返した。

シンクにいた良人が、何か言おうと彼の後ろ姿を睨んだ。

ふたりの会話に割って入る慶太。

「ふたりともさ、朝から静かにしたらどうだ？」

ほとんど呆れ顔。ふたりのケンカに見兼ねて、慶太がキッチンの入口でふたりに声を掛けた。

朝から、余計な事を言われたくない祐大は、彼に減らず口を叩く。

「兄貴、タダの……日常会話だよ」

慶太はそんな嫌味に応える事なく、無視。キッチンの中を歩き進む。

良人はそれまで歯を食いしばった険しい顔をしていたが、今はいい気味そうに、コッソリとひとりで笑みを浮かべるのだった。

新しい日常？

ふたりのやり取りを見ていた良人は、晴れやかな表情。慶太へ爽やかな朝の挨拶をした。

「慶太、おはよう」

「慶太さん、おはようございます」

近くを横切る慶太に、昨日の一件もあって、彼に目を合わせられないでいる莉亜。

慶太は横目でチラツと莉亜を見たが、何も反応しない。涼しい表情で、彼女の事を華麗にスルー。コーヒーを作る為、キッチンの奥へ。

良人が慶太の耳そばまで近づくと、ぼそぼそ何か言っている。

「慶太、彼女声掛けたんだから、応えてやってくれよ」

その言葉が気に触ったらしく、露骨に嫌そうな顔をする慶太。ジッと彼を睨む。

良人はそれでも動じる事なく、慶太に向かって、ニッコリ微笑んだ。

観念した様子の慶太はため息ひとつ吐く。それから、仕方なく莉亜へと挨拶を返すのだった。

「おはよう」

慶太が、それでも莉亜を見る事はなかった。

良人はふたりのそんな様子に、何も気づかない。得意げな顔をして、彼の耳元でささやく。

「分かって貰えて、よかったよ」

「ご満悦な笑顔で、自分の席に座る良人。

隣には少し元気がなくなった莉亜が食事を取っている。

「そう言えば、片瀬さん、俺たちと同じ大学だよな？」

「うん、そうなんだけど……」

食事の手を止めた莉亜、それ以上何も言えないでいる。

「どうかしたの？」

「その……できれば、誰か一緒に

「お前、俺らと同じ大学なわけ？」

ふたりに対して、無関心だった祐大が、急に会話へ割り込んできた。

「うん。一緒に来てもらえたらって」

「わりいけど、お前の子守なんかできる程、暇人じゃねえよ」

食べ終わった皿をそのまま残し、祐大はそう言って、さっさとキッチンを出て行った。

すぐさま、良人が莉亜に声を掛ける
このチャンスを逃さ
んとばかりに。

「じゃあ、片瀬さん。俺と一緒に行くから」

「ホント？」

「うん、だから安心してよ」

「ありがとうございます」

「うん。最初から案内するつもりだったからね」

「よかった。ひとりじゃ、少し心ほそかったし……」

「じゃっ、元気出して、ご飯食べて」

「うん」

ふたりとも満面の笑みで、朝食を再開する。

コーヒーカップだけを持った慶太が、楽しそうなふたりを横目にキッチンから出て行くのだった。

第13話 願望と妄想

ふたりは朝食をすませて、約束通り、一緒に大学に来ていた。大学生たちがいるんな会話をしながら歩いている廊下には、莉亜と良人の姿も。

良人の案内で、大学構内を歩く。廊下にはたくさん学生の行き交う姿が、みんな忙しく動いているようだ。ふたりはそんな風景の中、話しながら歩くのだった。

「俺たち兄弟は父親と一緒に、みんな母親が違っんだ」

莉亜は良人の話に、言葉を選びながら、探り探りで答える。

「それって　　すごい事、だね……」

「まあね。俺は兄弟ができて嬉しかったかな」

「それ、なんとなくわかる気もする、な」

「他のみんなはどう思ってるかは、わからないけど」

「みんな、きつと良人くんと一緒だよ」

「あんな連中だから、どうだかね……」

良人は兄弟の事を考えてか、黙り込んだ。

莉亜も彼の話してくれた事を、頭の中で整理する。少しの沈黙の後に、再び話し出すのだった。

「　　そっか……それで、みんな同じ歳なのね」

「ああ、龍之介は親父の事よく思ってないし、双子もマイペースな奴らだから、色々苦労するよ」

「みたいだね」

莉亜と意見があつたのが、意外だったのか、驚いた様子。

前を向いて歩いていた良人は、無意識の内に莉亜の方を見ていた。

「もう、片瀬さんにでもわかるんだな」

「うん、なんとなく……は」

「まっそんな悪いやつじゃないから」

「かな？ みんな気難しそうな感じするけど」

「それはその通りだね」

良人と同じ気持ちなのが、今ならよくわかる気がする莉亜だった。ふたりは顔を見合わせて笑う。

笑っているふたりを近くをすれ違った学生らが、迷惑そうな目でチラツとふたりを見た。それにふたりは気づくと笑うのを、一緒にやめるのだった。

しばらく、廊下を歩いていた足を止める。急に真剣な顔で莉亜を見る良人。

「もし、何か困った事とかあれば、俺に何でも相談してよ」

「うん、ありがとう」

「まあ頼りにならないかもしれないけど」

「ううん、そんな事ないよ。頼りにしてます」

「そう言ってもらえるとうれしいなあ」

莉亜の顔を見つめると、良人は相変わらずだらしなく顔を緩ませる。

（かわいい笑顔。この笑顔を、俺が絶対あいつらから守ってやんな

くっちゃな)

良人はこんな事を勝手に思い込んでいるのだった。そして、今日の学校終わりの事も妄想しているようだ。

「片瀬さん、よかつたら今日講義終わったら、俺と
つてい
ない」

とつくの昔に莉亜は構内を探索し始めていた
勝手に
使命感に燃え、妄想する良人をほつたらかしにして。

「あ、あれ？ 片瀬さん？ どこ行つたんだらう？」

他の学生が不審そうに、ヒソヒソ声で、良人を避けて、何か会話している模様。みんな彼に関わらないように、避けて歩くのだった。周りの視線に耐えかねた良人は、莉亜を探すのに自分もそこから離れる事にした。

第14話 ピンときた嘘？

その頃、莉亜は構内を何の案内もなしに、歩いていた。

「あれ、ここじゃないんだ。文学部の教員室はどこなんだろう？」

歩き疲れた莉亜は一旦構内から外に出る。

外は講義を受けてない学生が、友達と思い思いに過ごしているようだ。

莉亜はどこか休憩できる場所を探し、キャンパスを歩く。普通に歩いているだけのはずなのに、通り過ぎる学生たちが、自分を注目している。

「なんか視線を感じる　　気が」

ほとんどが女性の冷たい視線。

気にしないように莉亜が歩いていると、視線の先に女子大生の集団がこちらを見ている様子。通り過ぎようとした時、その集団のリーダー各っぱい人間が、腕を掴んだ。

「ちょっと、一緒に来てくれない？」

「えっ　　あたし……ですか？」

「そうよ」

「嫌です。あたし先を急いでるんで」

「嫌とはよくいうじゃない」

「だって、あなた方の事知らないですし、急いでるんです」

「いいわ。じゃ、実力行使って事で」

その言葉と同時に集団から、ふたりの人間が出てきた。

「へっ？」

莉亜の間抜けな声と共に、彼女の両腕をがっちり確保するふたり組。抵抗するまもなく、彼女を人目のないところに引つ張り連れて行く。彼女がいた場所には、彼女が引つ張られた痕跡だけが残るのだった。

「単刀直入にきくけど、貴女が、例の榊原家の居候？」
「だったら、どうなんですか？」

莉亜は努めて強気に答えるが、人気のない場所に目をギョロギョロして、落ち着かない様子。

（例のって気になるけど、それよりもやっぱりしゃばいよね……この状況）

耳をすませると、建物の向こう側にはたくさんのお学生がいるようで、賑やかな雑踏に、うるさいぐらいの若い男女の会話が微かに聞こえる。イカレタ集団の目を盗んで、莉亜が周りをくまなく見る。何かされればいつでも逃げられるように、建物の中の逃走経路を探した。

「これから質問する事に、答えてくれればいいから」
「ちょっと、待って」

莉亜は冷静を装った感じにふるまうが、だんだん焦り出してきていた。何度も辺りを見るが、頭がパニックって自分が通れるような逃走経路がなかなかみつけれない。

(落ち着かなきゃ、落ち着け、落ち着こう　　って、話をなん
とか、長引かせなきゃ)

莉亜が動揺する中、リーダー各の女性はいたって落ち着いた様子。

「でっ　何？」

「あたしも、聞きたい事が、あるかな」

「なによ？」

「あなたたちは、いつたい、なんなの？」

「よく訊いてくれたわね、あたしたちファンクラブなの」

「誰の？」

「榊原四兄弟の」

「うそ　だよな？」

「残念ながらホント。貴女こそ、榊原家のなんなの？」

「あたし？　あたしは　」

「返答次第じゃ、タダじゃすまないから」

「えっと　」

(なんて、答えればいいのっ、刺激しないような答えって、ある？)

視界に入る集団を見つめ、莉亜はこれでもかっと言っぐぐらいに自分の頭をフル回転させる。

ピンときた嘘？

「どこに行ったの？ 案内役の俺はここだよって、もうこの辺りにはいないか」

良人は、莉亜がイカレタファンクラブに捕獲されている頃、必死に愛おしい彼女の姿を探して、構内を駆け巡っていた。

「それにしても、片瀬さんどこに行ったんだろ……」

良人が構内を当てもなく探していた所、ふと立ち止まって窓の外を見る。

「そうだ、もしかしたら」

階段を駆け下り、外に続く出口へと、自然と足が向かうのだった。

外のキャンパスには学生たちが日の光を浴び、健やかに過ごしている。

中には、歩きながら教科書とにらめっこするものや、友達と音楽ツールで、音楽を楽しんでいる人も。

周辺に注意をしながら、足早に通り過ぎて行くと、ある男女の集団が視界に入ってきた。ざわついている集団へ駆け寄って近づくと、集団の輪から少しはみ出ているひとりに、声を掛けた良人。

「あの、どうかした？」

男子学生が後方にいる良人の方へ振り向きむく。

「つえ、ああ……それが」

「それが？」

「あまり見かけた事ない女子がね……」

「その、女の子が、どうかしたの？」

ほんの少し男子学生の声のトーンが下がる。

「それが例の……あのファンクラブに連れていかれた、ら、し……」

男子学生は話ながら、言葉の最後がだんだん途切れ途切れになる。彼はなぜかマジマジと良人の顔を食い入るように見た。ハツと何か気づいたのか、男子学生がそれを確かめようと話し出す。

「きみって」

男子学生が話しかけたのにも関わらず、あとずさりしながら、彼の話聞く事もなく、男女の集団から離れる。

険しい表情で、良人がすでにキャンパスを走り出していた。辺りの建物の隙間だとかをうかがいながら、雑踏の中を、莉亜の事を思うと、いつの間にか不安な気持ちでいっぱいになっていた。

（まさか、あいつらが片瀬さんを　まさかな……）

肩を上下させる良人は息があがり、額には薄っすら汗が出ている。

「ああ、もうダメだ、少し休もう。いったい、片瀬さんどこ行ったのか」

（あいつらが、“あいつら”かもわからないし、連れて行かれたのが、片瀬さんとも限らない……とも限らないな）

周りを見ると、人気のない倉庫が立ち並ぶ場所まで来ていた。

ココは滅多に人が出入りしない場所。学生も講師もほとんど来る事のない場所だけに、シーンと静まり返っていた。

数名の女性の声が良人の休んでいる耳へ、微かに聞こえてきた。耳を澄ませるが、内容はあまり把握できなかった。

それでも、良人は何か揉めている様な雰囲気を感じ取るのだった。

「言いたい事があるなら、さっさと言ってくれろ？」

倉庫の向こう側ではジリジリせまる集団になすすべもなく、おびてえている莉亜。

倉庫の隙間から見た良人には少なくとも、莉亜の横顔がそう見えているのだった。

歯切れが悪いままの莉亜は頭をフル回転させて考えているが、自分でも何を言えばよいのか、まだ困っていた。

「あたしは　　あたしは……だから、その」

(何か　　何か、いい解決策が　　ある、はず)

莉亜がそんな事を思っていると、ピンっと頭にひらめく。

「あたしも、ね……あたしもね　　」

何度も同じ言葉を連発。莉亜は瞳を閉じると、軽く息を吸いこんで、心を落ち着かせる。

「もういい加減にしてくれない？　あたしも、なんなのよ、その先？」

莉亜の勿体ぶった口ぶりに、ゴクリと生唾をその場にいる全員が、思わず飲み込む。

「あたしもね　　彼らの兄弟のひとりなの」

誰も何も言わなくなって、無言のまま、みんな微動だにしなくなつた。

リーダー格の女性の顔が少しずつ赤くなるのに、莉亜は気づいた。そして、そんな相手の表情から、状況を察した。莉亜が肩を落としたり瞬間、彼女の首回りの服をリーダー格の女性が粗々しく掴んだ。

「あんなね、あたしらの事、おちよくってんの？」

莉亜とは無関係に後ろの方のファンクラブ集団が、ざわつく。イカレタ集団の後方で、男性の怒号がするのだった。

第15話 胸キユンな脱出劇？

「おい、あんたら何してんだよっ！」

男子学生がズカズカとファンクラブ集団後方から、彼女たちをかき分けてやって来るのが、莉亜の目にも映った。

周りのうるさい雑音で、かき消されない様なデカい声と共に、太い腕が伸びて来た。そのたくましい腕がフリーになっていた莉亜の腕を掴んだ。

「こつちに来い！」

予想だにしない出来事で、リーダー格の女性が驚いた様子。その拍子に胸ぐらを掴んでいた手が、取れる。

隙ができたらしく一気に、莉亜は腕が現れた方に引きずり込まれるのだった。

なにがどうなっているのか、莉亜は戸惑いを隠せないでいる。

男子学生が戸惑っている彼女にもう一度声を掛けた。

「俺を信じる！」

力の入った莉亜の腕から、その言葉で自然と力が抜けていく。彼に身を任せる事にした。

ファンクラブ集団の間をかき分け、ふたりは抜け出す。

莉亜の窮地を救った男子学生が、急に構内の入口で立ち止まって、振り向いた。

「妹は返してもらおう、それじゃ」

得意げな表情を見せ、男子学生は口角の片方をニツと上にあげた。

あつけにとられたままのイカレタ集団は、誰もがポカんと口を開けたまま固まっている。倉庫が立ち並ぶ場所から、男子学生が走り去るのだった。

莉亜は後方から、腕を握って無言で走る彼を見つめる。

(この人、どこかで……見覚えが、ある)

走っている間中、バクバクと心臓が、振動するのがわかった。自分に優しくふれる風が、なぜだか冷たくて気持ちいいと、莉亜は感じていた。自分の身体全体が火照っているからか、頭がボーっとしている。

そんな莉亜の目の前に急に建物が現れるのだった、それはキャンパスへ戻る入口。そこから構内に入って、賑やかな音がするキャンパスへ、ふたりはもう少しだけ歩くのだった。

しばらく構内の廊下を進み、男子学生が出口で立ち止まるとそれに連れて莉亜も立ち止る。

「もう、独りでも大丈夫だろ？」

「腕、痛いよ」

莉亜がそう言って、男子学生がしっかりと掴んで今だ離さない自分の腕に視線を送ってみせた。

男子学生は莉亜に言われて初めて気が付いた模様、自分の手が彼女の腕を痛めている事に。慌てて彼女の腕を離した。

「ああ、ごめん」

掴まれていた腕を片方の手でさすりながら、莉亜は視線を外に向けて。ガラスの押しドアから、キャンパスの中心の広場が見えるのだった。

莉亜はやつとこさ、ホツとして、ため息をついた。視線をまた龍之介に戻すと話し始める。

「も、もしかして、さか　　さかき、榊原龍之介くん？」
「えっ何？ 俺ってわからなかったのか、マジかよ」

まいったというように、呆きれる龍之介。　自分の反応とは違って、莉亜はキョトンとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4275p/>

ブラザーズLOVE

2011年12月18日11時54分発行